

—— 千葉県市原市 ——

みなみ ふ じ だい  
南 富 士 台 遺 跡

1 9 8 7

千葉県土木部  
財団法人 市原市文化財センター



## 序 文

市原市は、房総半島東京湾岸の中央部に位置し、地理的にも気候的にも恵まれ、永い歴史の足跡としての埋蔵文化財が数多く残されております。また、昭和30年代後半より、京葉工業地帯の一角として地域開発が進み、文化財保護との調和の必要性が年々高まっております。

今回の調査地である鶴舞南富士台遺跡は、市原市大字鶴舞字南富士台にあり、県道鶴舞牛久線改良に伴い実施されたもので、歩道建設部分の極めて小規模調査でしたが、貴重な資料が得られました。

本書は、この調査によって得られた成果をまとめたものであり、学術的な資料としてはもとより、今後の埋蔵文化財の保護・涵養そして活用と、一般市民の方々にも広く活用され、役立つことができれば、幸いと存じます。

最後に調査にあたり、千葉県市原土木事務所、千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会をはじめ、地元の方々に御協力をいただき厚くお礼申し上げます。

昭和62年 3 月

財団法人 市原市文化財センター  
理事長 星 野 一 郎





## 例 言

1. 本書は、千葉県市原市鶴舞字南富士台1028-5番地ほかに所在する、南富士台遺跡の調査報告書である。
2. 調査は、千葉県土木部道路建設課による県道鶴舞牛久線の改良工事に伴い実施したものである。
3. 発掘調査、整理作業、報告書作成作業は以下のとおり行った。

発掘調査	昭和60年5月1日～昭和60年7月13日
担当	調査研究員 近藤 敏
整理作業	昭和61年10月1日～昭和62年3月31日
担当	調査研究員 近藤 敏

なお、調査研究員高橋康男、田所 真、木對和紀が協力した。
4. 本書の原稿執筆は、近藤 敏が行った。
5. 発掘調査から整理作業の過程で、以下の諸機関の御指導、御協力を賜っている。

千葉県土木部道路建設課、同市原土木事務所、千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会教育指導部文化課
6. 本書に使用した方位は座標北である。
7. 本書に使用した地形図は、国土地理院発行の1：50,000鶴舞（千葉16号）である。また、第2図は市原市地形図K7(1:2500を1:5000に縮小)を使用している。

### 組 織

#### 役 員

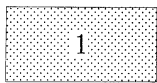
理 事 長	星野一郎 (教育委員会教育長)	理 事	中島英夫 (市都市部長) <昭和60年度>
副理事長	横濱辰夫 (教育委員会 教育指導部長)		地引希孝 (市都市部長) <昭和61年度>
常務理事	内藤 隆 (専任) <昭和60年度>	理 事	松下 隆 (市総務部財政課長)
	岩見一民 (専任) <昭和61年度>	監 事	松本辰之助 (教育委員会 総務課長) <昭和60年度>
理 事	滝口 宏 (早稲田大学名誉教授)		齋藤崇雄 (教育委員会 総務課長) <昭和61年度>
理 事	寺村光晴 (和洋女子大学教授)	監 事	白鳥一夫 (市会計課長)
理 事	海上信久 (姉崎神社宮司)		
理 事	松崎良一 (市企画部長)		
理 事	齋藤栄亮 (市総務部長)		

## 職 員

庶務課		調査課		
課 長	田丸 萬富	課 長	清藤 一順	調査研究員 高橋 康男
主事補	大鐘 光江	主 幹	石田 広美	田 所 真
事務員	秋田 晴美	主 幹	山口 直樹	木 對 和 紀
	藤澤ひとみ	主任	宮本 敬一	田 中 新 史
	石渡あゆみ	調査研究員	米田耕之助	半 田 堅 三
		調査研究員	田中 清美	鈴木 英啓
			浅利 幸一	事 務 員 高浦 貞子
			大村 直	長谷川いづみ<昭和61年度>
			近 藤 敏	

## 凡 例

本書に用いた遺構の名称・番号等は、既刊の年報等のそれとは異なる場合がある。これは本書の作成に際し、発掘調査で使用したものを整理・改訂したためである。



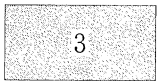
本書における遺構・遺物の指示は以下のとおりである。

住居跡・炭窯1/80、土壇・その他の遺構1/60、土器実測図1/4、土器拓影及び断面図1/3、石器実測図原寸・しかし一部1/3にしている。

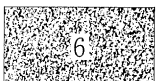


遺物出土状態においては、●を土器で▲は石器としている。

スクリーン・トーンの指示は左記に例示してある。1は焼土で炉、焼失焼土をも表わす。2は貼床で平面断面図共通である。3は柱痕を表現し断面のみ用い推定も表わす。4は平面図における柱痕と柱の推定位置を示す。5は遺構における基盤層面でありロームとは限らない。6は粘土及び構築材を示す。7は平面図における炭化物の位置と範囲を示している。



遺物観察表の原則は次のとおりである。「せいけい」の矢印は技法の新旧関係を表わす。(旧→新) (・)は上下関係で(上位・下位)となる。実測図は統一を原則としたが、一部統一を計れていない。本書は遺構番号と遺物の注記番号は同一であり、南富士台遺跡の注記コード番号は「セ36」である。X・Y数値は、平面直角座標第9系座標に基づく各座標値である。



土層図中の水糸レベル数値はすべて標高を示す(単位m)。本遺跡は小発掘域のためグリッドを設定しなかった。

## 本文目次

序文	理事長 星野一郎
例言	
組織	
凡例	

I 経過と環境	1
1 経過	1
2 環境	1
II 遺構と遺物	4
1 概要	4
2 住居跡	4
3 土 壙	19
4 炭 窯	21
5 遺構外出土の遺物	22
弥生・古墳時代	22
縄文時代	25
III 小 結	28

## 挿 図 目 次

第1図 位置図	2	第10図 4号住居跡	9
第2図 遺跡周辺地形図	3	第11図 4号住居跡出土土器	11
第3図 遺構分布図	4	第12図 7号住居跡	12
第4図 2号住居跡	5	第13図 7号住居跡出土土器	12
第5図 2号住居跡出土土器	5	第14図 8号・9号住居跡	13
第6図 2号住居跡出土石器	5	第15図 8号住居跡出土土器	14
第7図 3号住居跡	6	第16図 8号住居跡出土土器 (菊川式)	14
第8図 3号住居跡出土土器	7	第17図 8号・9号住居跡出土土器	15
第9図 4号住居跡炭化材・遺物検出状況図	8	第18図 11号住居跡	15

第19図	11号住居跡出土土器	-----16	14号炭窯	-----20	
第20図	12号住居跡	-----16	第26図	5号遺構出土土器	-----21
第21図	12号住居跡出土土器	-----17	第27図	遺構外出土土器	-----22
第22図	12号住居跡出土石器	-----18	第28図	遺構外出土土器	-----22
第23図	13号住居跡	-----19	第29図	遺構外出土土器	-----24
第24図	13号住居跡出土土器	-----19	第30図	遺構外出土土器	-----25
第25図	1号土壇・5号土壇・6号溝・		第31図	遺構外出土石器	-----27

## 表 組 目 次

第1表	2号住居跡出土石器観察表	-----5	第7表	12・13号住居跡出土遺物観察表	--17・18
第2表	2・3号住居跡出土土器観察表	-----7	第8表	5号土壇出土土器観察表	-----21
第3表	4号住居跡出土土器観察表	-----8・11	第9表	遺構外及び遺跡周辺出土土器観察表	-23
第4表	7号住居跡出土土器観察表	-----12	第10表	縄文式土器野島式土器組成一覧表	---26
第5表	8・9号住居跡出土土器観察表	-----14	第11表	縄文時代石器一覧表	-----27
第6表	11号住居跡出土土器観察表	-----16			

## 図 版 目 次

図版1	周辺地形航空写真
図版2	東地区遺構検出状況，西地区遺構検出状況，東地区住居跡群，3号住居跡調査風景
図版3	2号住居跡，3号住居跡，3号・7号住居跡調査風景
図版4	4号住居跡，3号・7号住居跡，7号住居跡
図版5	8号・9号住居跡，8号住居跡遺物出土状況，8号住居跡菊川式壺出土状況
図版6	11号住居跡，11号住居跡炭化材検出状況，11号住居跡炭化材検出状況近接
図版7	12号住居跡，12号住居跡覆土断面，13号住居跡遺物出土状況
図版8	1号土壇・6号溝・5号土壇・14号炭窯
図版9	出土土器（3号・4号住居跡，5号土壇）
図版10	出土土器（8号・12号・13号住居跡，遺構外）
図版11	出土土器（2号・3号・4号・7号・8号・9号・12号住居跡，5号土壇，遺構外）
図版12	出土土器（遺構外縄文式土器），出土石器（2号住居跡，遺構外）

## I 経過と環境

### 1 経過

千葉県が道路整備の一環として市原市内牛久と鶴舞を結ぶ県道鶴舞牛久線の改良工事に先がけ、市原土木事務所長より、事業地域内における埋蔵文化財所在の有無及びその取り扱いについての照会が提出された。それについて千葉県教育庁文化課、市原土木事務所、市原市教育委員会文化課の三者による協議の結果、記録保存とする方針が決められた。発掘調査は、財団法人市原市文化財センターの委託事業として、市原市大字鶴舞字南富士台1028-5番地他の 350㎡を対象として、県教育庁文化課の決定、指導により本調査の手段が決められ、昭和60年5月1日より同年7月13日の間2回に分けて本調査を実施した。整理作業は、昭和61年10月1日より昭和62年3月31日の間行なわれた。

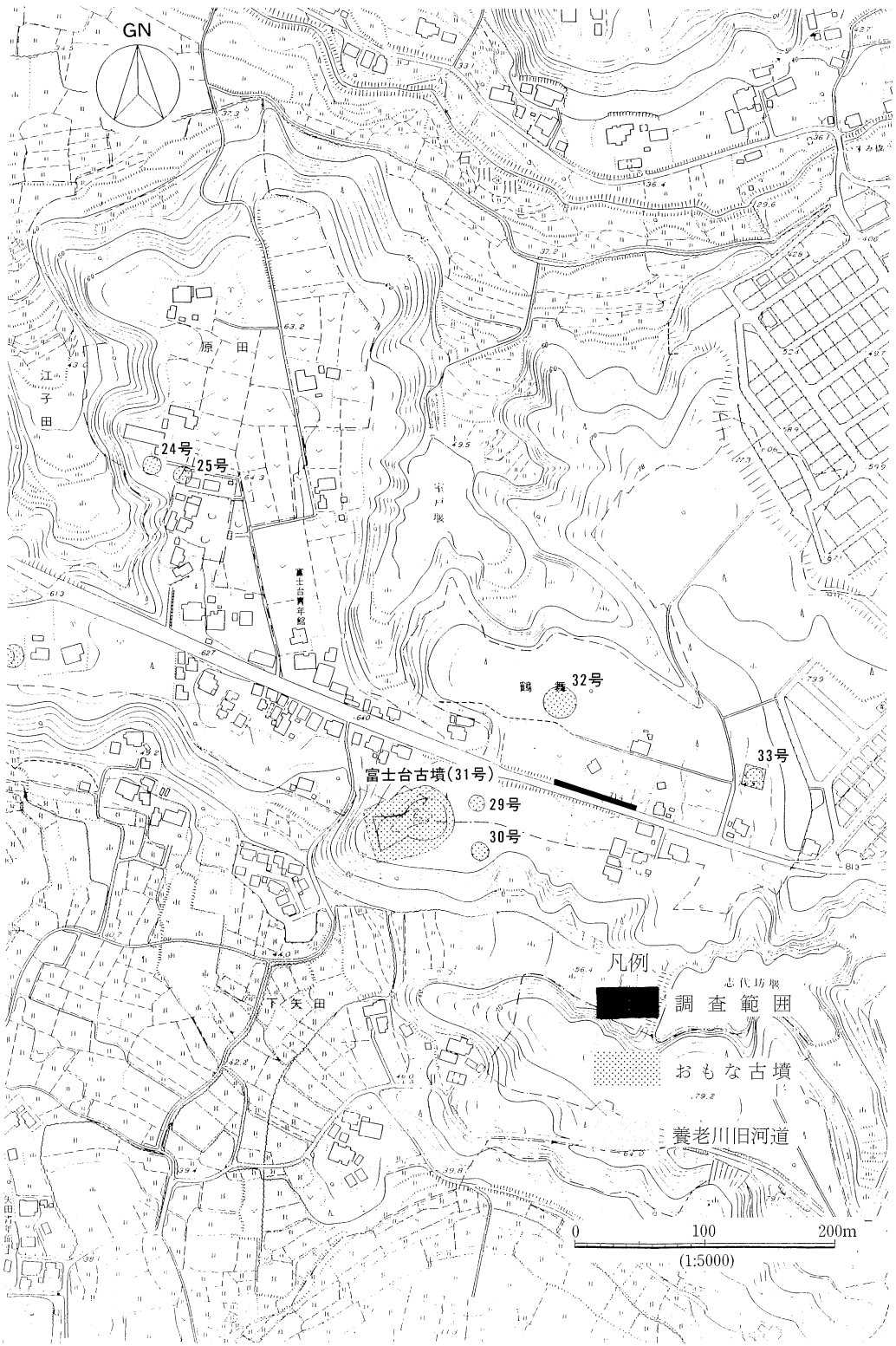
### 2 環境

南富士台遺跡(図-1)は、房総半島中央部清澄山系に源を発する養老川の中流域で養老川・平蔵川と内田川支流石川川とに挟まれた丘陵上に位置する。鶴舞丘陵は、標高100m付近の鶴舞から、標高30m位の牛久まで4kmを階段状に下っている。丘陵上北西端の標高50m付近には、弥生時代中期～古墳時代後期までの南総中学校遺跡(1図-2)があり、西端、標高60m付近の東西1km・南北400mの台地上には、金環塚古墳、雪解沢遺跡(1図-3)がある。本遺跡は、雪解沢遺跡の東方500mの一段高い標高70m位の台地上にあり、南北200m、東西300m位の長方形台地の中央にある。北半分は石川川に侵刻され、南半分は養老川水系となる分水嶺に位置する。6万㎡に満たない台地上には、全長70mを計る盾状周溝を有する富士台古墳がある。さらに遺跡周辺では墳丘を有する5基の古墳がある。東方は一段と高い標高80mの台地で一連の江古田遺跡群の東端となり、南側は谷を隔てて標高70m位に古墳時代の神林遺跡がある。富士台古墳は、養老川の開析した矢田の広い沖積平野が一望出来る眺望の地であり、立地、墳丘形から5世紀前半から初頭まで時期を遡る考えがある。増々重要性、関心の高くなる古墳である。

本遺跡の縄文時代は、野島式土器がややまとまって出土し5km南方にある新井花和田遺跡(1図-7)が当該期の集落としてとらえられている。中・後期の土器片も若干採集されていて、南総中学校に調査例がある。弥生時代中、後期には、南総中・土字遺跡のNo.100地点(1図-1)があり、近くでは女坂第1号墳丘下に調査例がある。五領式期・古墳時代前半には雪解沢に周溝墓があり、養老川上流には弥生時代～古墳時代にかけての集落、番後台遺跡(1図-6)がある。それ以後著名な遺跡としては、永田不入窠(1図-5)があり本遺跡の北東1kmには石川窠が4基確認されている。当遺跡内でも須恵器片が採集されているが、いずれも小片であり図示できなかった。以後明治維新後の井上氏の転封があるまで、南富士台が地形改変するまでの事件は無く、井上氏の鶴舞城築造の際の街道整備に土塁が造られている。



第1図 位置図 (1:50000姉崎)



第2図 遺跡周辺地形図

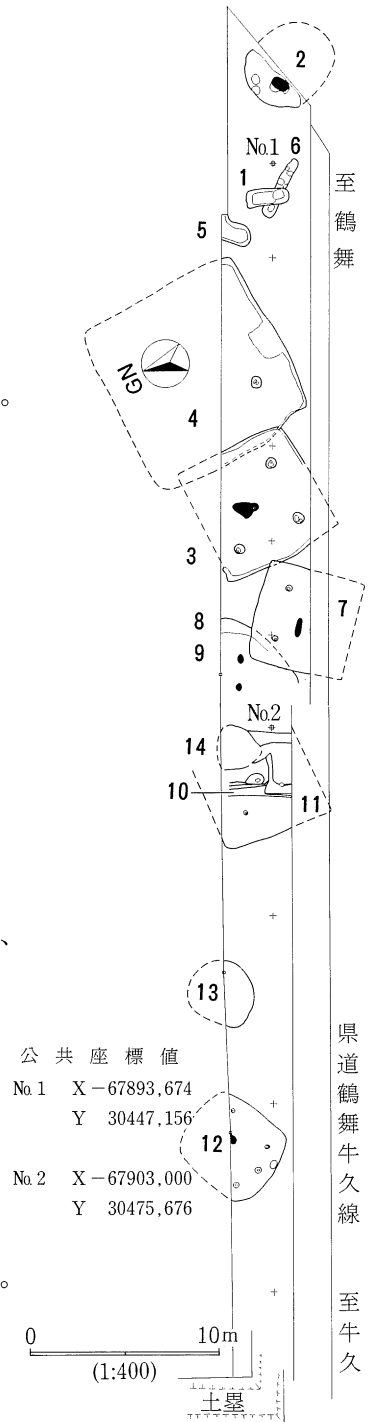
## II 遺構と遺物

### 1 概要

縄文時代の遺構は全く検出されなかった。そのため遺物はすべて包含層出土か、後の遺構に完全に破壊されてしまったものと考えられる。事実、縄文時代の遺物のほとんどが弥生古墳時代の住居跡覆土の出土となっている。弥生時代の住居跡は5軒で、うち8・9号は建替えと考えたい。2・8・9号は長軸を北北西に向け、12・13号は東北東に向いている。住居跡の推定規模は長軸で、2・13号→4m<12号→5.5m<8・9号→8mと中央に位置するものが大きいことになる。古墳時代前期の住居跡は、4軒でいずれも複合又は近接している。3・4・11号の主軸はやや西に振る北方向で、7号は不明確だがそれらより50°位東へ向くことになるだろう。住居跡の推定規模は主軸で、7・11号→5.5m<3号→6.5m<4号→9mとなる。4・11号は焼失住居である。4住居跡は30mの範囲で東西に連なっており、向かいの道路のカッティング面でも同時期の住居跡が観察されることから、南側方向へ広がると思われる。富士台の台地は、南側半分が標高で1m位高く、排水は北と西へ向くと考えられ集落の選地条件としても南半分が良好である。古墳時代前期以後の住居跡は南富士台遺跡調査域では存在しない。遺物も古式土師器以降は、数片の須恵器を除いて皆無である。住居跡の他に、時期不明の遺構が1・6号として2基あり、敢えて時期を限定するならば、住居跡群と伴う関係であると思う。土壇としているが性格不明な遺構として5号がある。遺物を覆土上層に含み、五領式期に限られるが、調査区外に連続するため完掘されていない。溝状遺構の端部とも考えられる。近代になると炭窯が1基あるが、これも調査区外部分があり完掘できなかった。

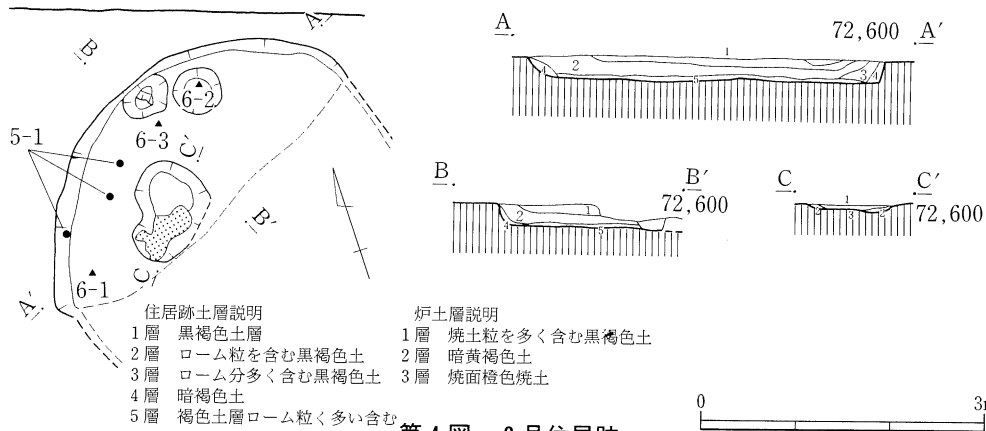
#### 2号住居跡 (4図～6図、1・2表、図版3)

位置は調査域の一番東にあり、道路、歩道建設で削られ一部しか残存していなかった。貼床を有せず、ローム地山を踏み堅めた面に地床炉とピットが2つあった。壁際に並んであ



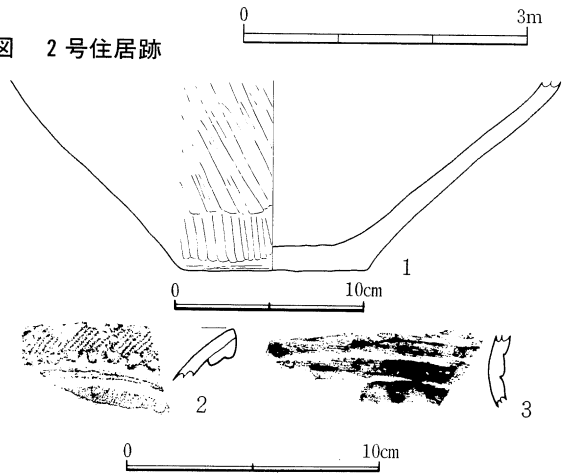
第3図 遺構分布図



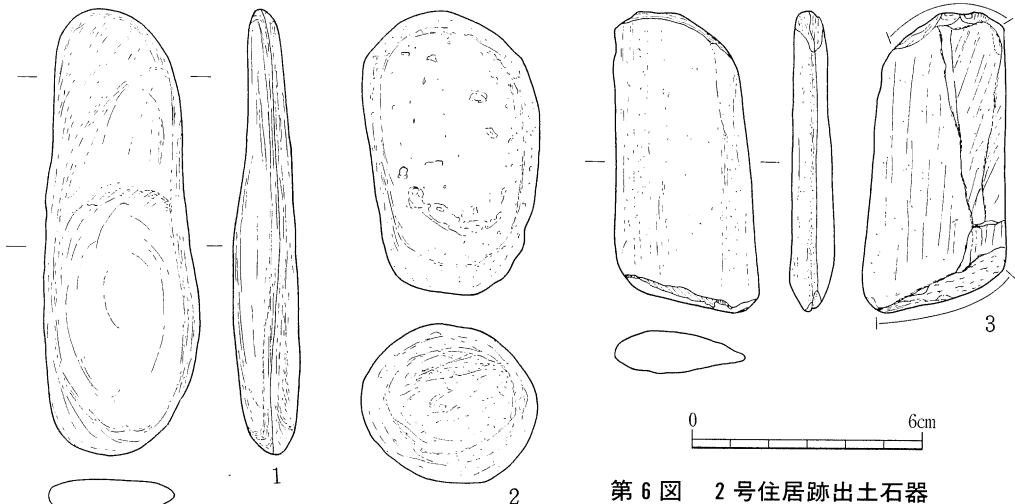


第4図 2号住居跡

り貯蔵穴であろう。深さは床より-10cm位である。覆土は自然堆積であり、遺構確認は容易であった。壺底部(5図-1)は2層中の下部にあり2次的に住居内に廃棄されたものである。3個の石器はすべて遺棄されたものとする。2号住居跡は破壊された部分が多く、プラン・規模は不明な点が多いが、炉の位置から不整形で規模の小さい弥生時代終末期の住居跡と考えられる。



第5図 2号住居跡出土土器



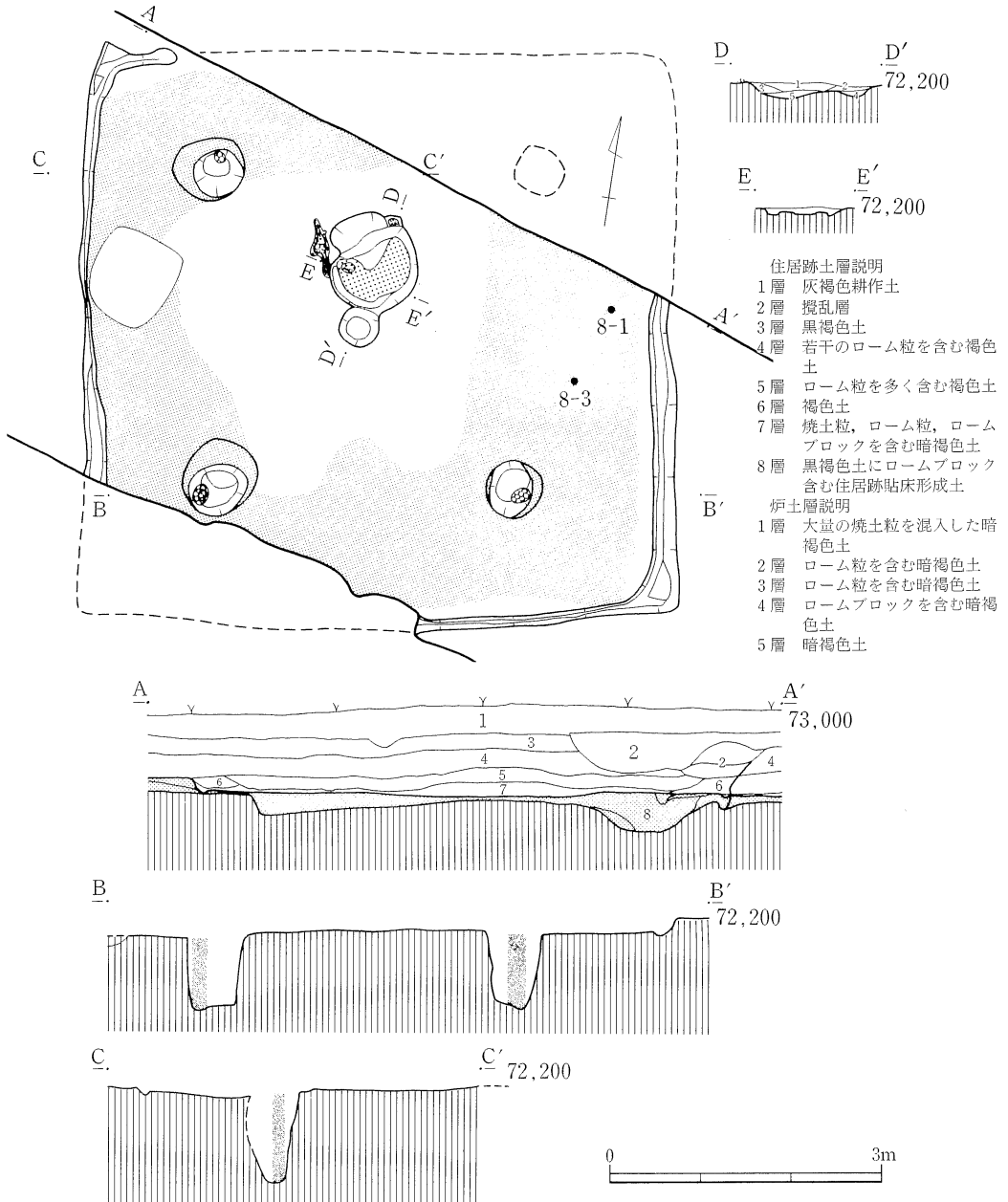
第6図 2号住居跡出土石器

第1表 2号住居跡出土石器観察表

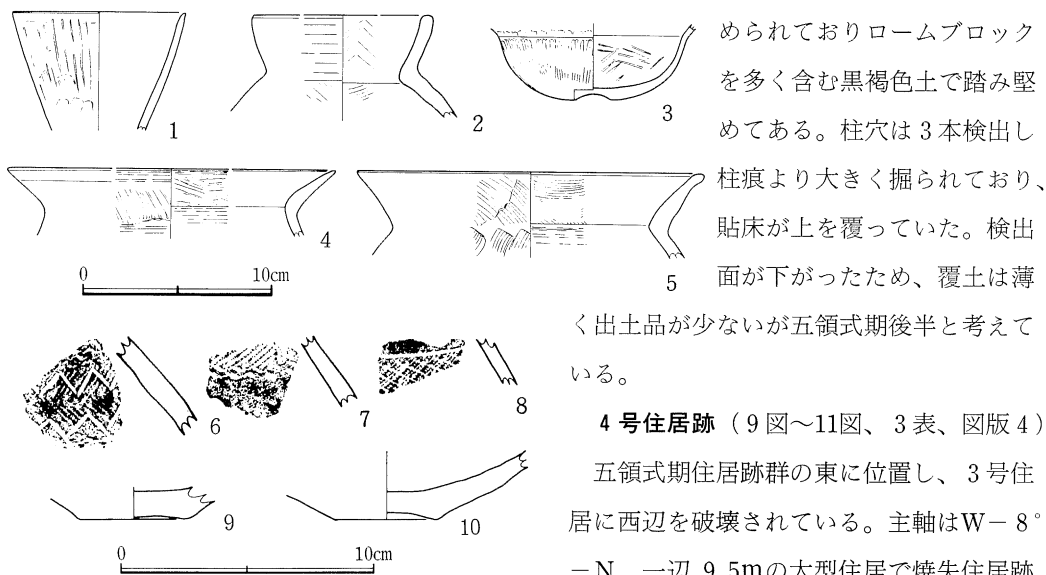
挿図番号	器種(形態)	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	石材	備考
6-1	筥	118	40	17	111.7	砂岩	床直上出土
6-2	軽石	74	46	40	23.1	軽石	短軸方向に使用痕貯蔵穴内出土
6-3	筥	81	37	11	50.9	緑泥片岩	床より3cm浮き出土

### 3号住居跡 (7図・8図、2表、図版3)

住居跡群中にあり、東の4号住居跡を破壊し、西の7号住居跡に破壊されている。主軸方向はW-7°-N、一辺6.5m位の直角コーナーを有する竪穴式住居跡である。地床炉で粘土を用いているが周回せず北側に寄っている。貼床は主柱穴4本に囲まれた中央部分を残し、掘り窪



第7図 3号住居跡



第8図 3号住居跡出土土器

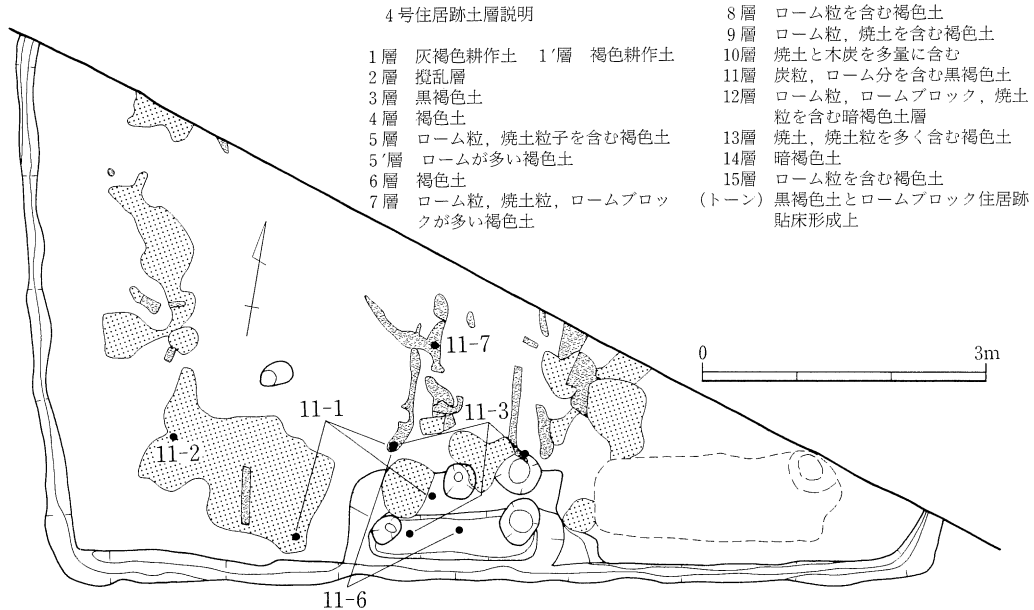
(1~5:1/4, 6~10:1/3)

構検出プラン時より覆土に橙色焼土が充満し、炭化材も広がっていた。遺物は焼土・炭化材精査時に検出され、床面よりやや浮いた状態での出土となった。床面精査から南辺部の中央に落ち込み状の方形プランが貼床検出面でも確認できた。しかし、L字に曲がる仕切は貼床除去ま

められておりロームブロックを多く含む黒褐色土で踏み堅めてある。柱穴は3本検出し柱痕より大きく掘られており、貼床が上を覆っていた。検出面が下がったため、覆土は薄く出土品が少ないが五領式期後半と考えている。

4号住居跡(9図~11図、3表、図版4)五領式期住居跡群の東に位置し、3号住居に西辺を破壊されている。主軸はW-8°-N、一辺9.5mの大型住居で焼失住居跡は、コーナーはほぼ直角に折れている。遺

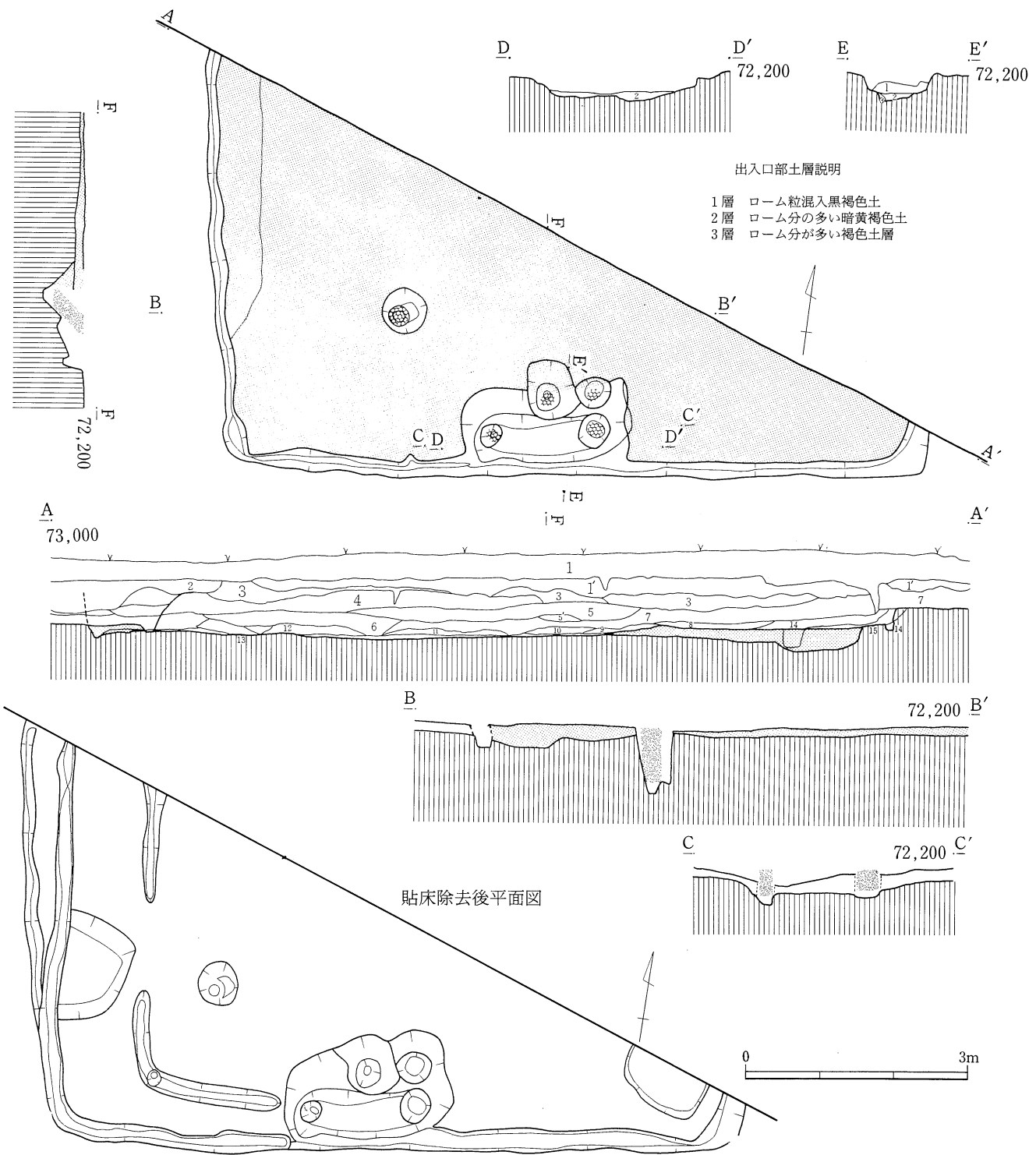
遺構挿図番号	器種	第2表 2号, 3号住居跡出土土器観察表					
2号住	壺	法量	底部径 9.5cm 胴部径29cm	現存率	胴下半部より底部	せいけい	外面斜位のヘラナデ内面
5-1		剥落	胎土 密で小角礫を多く混入	焼成	普通	色調	橙色 出土状態 やや浮き2層中
2号住	壺	法量	推定口縁部径22cm	現存率	口縁部1/10以下	せいけい	外面複合口縁2重貼り付け単節LR
5-2		斜縄文	内面ナデ 胎土 白色粒砂混入	焼成	普通	色調	橙色 出土状態 覆土中
2号住	甕	法量	推定頸部径20cm	現存率	頸部1/8	せいけい	外面3段輪積痕上にナデ 内面 ヨコナデ
5-3		胎土	密 焼成 良好	色調	灰褐色	出土状態	覆土中
3号住	壺	法量	口縁部径 9.2cm	現存率	口縁部のみ	せいけい	外面ヘラミガキ後ヨコナデ一部ハケ目 内面ヨコナデ
8-1		胎土	密 茶褐色粒砂粒若干混入	焼成	普通	色調	淡黄褐色 出土状態 床直上
3号住	壺	法量	推定口縁部径 9.4cm	現存率	口縁部1/6	せいけい	内外面ともヨコナデ 胎土 密わずかに混入物
8-2		焼成	良好	色調	褐色	出土状態	貼床下
3号住	埴	法量	頸部径10.3cm	現存率	口縁部のみ欠損	せいけい	内外面ともミガキが入るが荒く不明瞭
8-3		胎土	茶褐色粒を多く含む	焼成	普通	色調	褐色 出土状態 床直上に伏せてあった
3号住	甕	法量	推定口縁部径17.2cm	現存率	口縁部1/8	せいけい	外面斜位のハケ後口唇部ヨコナデ 内面横位のハケ頸部はナデ
8-4		胎土	密 焼成 良好	色調	黄褐色	出土状態	貼床下
3号住	甕	法量	推定口縁部径18.1cm	現存率	口縁部1/7	せいけい	外面斜位のハケ 内面横位のハケ後ヨコナデ口唇上に浅い沈線
8-5		胎土	密 焼成 良好	色調	褐色	出土状態	床直上及び貼床内
3号住	壺	せいけい	外面縄文施文→山形文施文→山形文区画内ナデ後赤彩 内面ナデ	胎土	・小角礫を含む	焼成	普通
8-6		色調	明褐色	出土状態	貼床中		
3号住	壺	せいけい	外面単節斜縄文LR・結節残→ヨコナデ 内面荒れている	胎土	密 焼成 普通	色調	明褐色 出土状態 覆土中
3号住	壺	せいけい	外面単節縄文原体軸の綱目状捺糸文施文→沈線区画→区画外赤彩 内面ナデ	胎土	密 焼成 普通	色調	黄褐色 出土状態 貼床下
8-8		胎土	密 焼成 普通	色調	黄褐色	出土状態	貼床下
3号住	甕?	法量	底径 4.4cm	現存率	底部のみ	せいけい	外面 ナデ 内面ヘラナデ
8-9		胎土	赤色橙色粒を多く含む	焼成	普通	色調	明褐色 出土状態 貼床下
3号住	?	法量	底径 3.8cm	現存率	底部1/2胴下部	せいけい	内外面ヘラナデ
8-10		胎土	密 焼成 普通	色調	褐色	出土状態	床直上



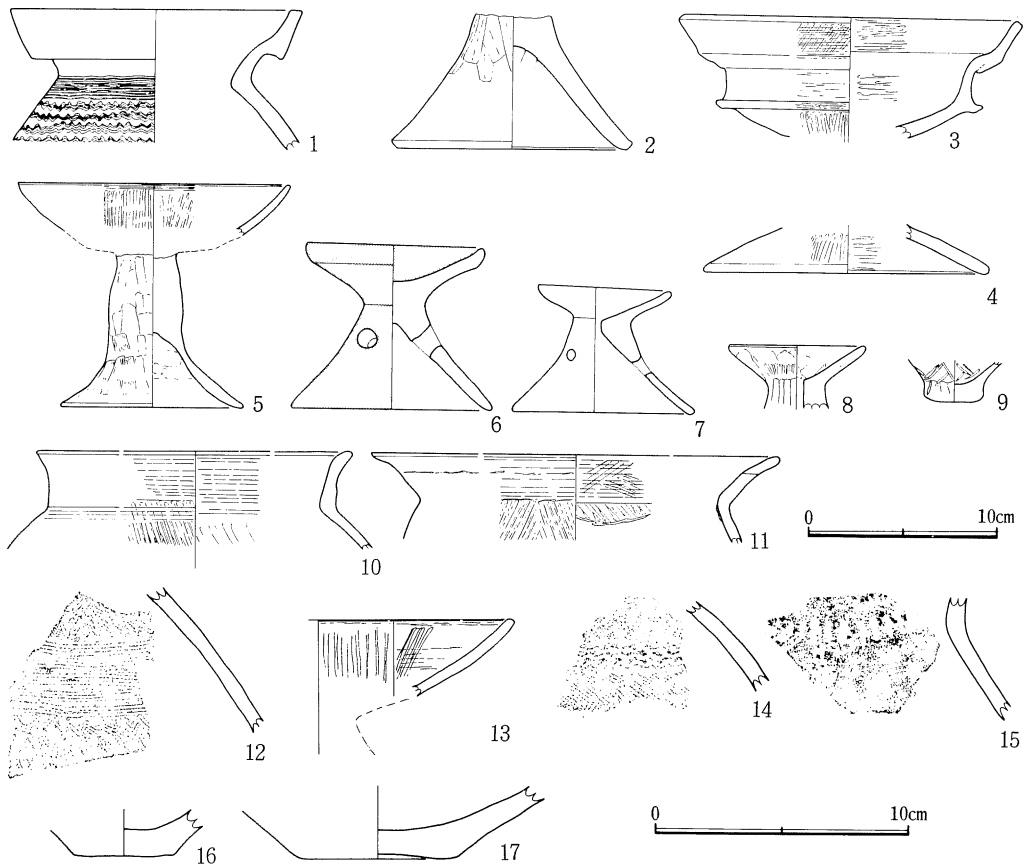
第9図 4号住居跡炭化材・遺物検出状況図

で確認できなかった。南辺部中央の方形の落ち込みは、貼床除去後に4本の柱穴が認められ焼土の分布も柱穴痕に合致し、出入口施設と考えられる。また出入口周辺部に遺物の量が多いことは、儀礼的なものかもしれない。4号住居跡は大型であり、遺物も豊富であった。時期的には五領式期の中葉を考えたい。

遺構挿図番号	器種	第3表 4号住居跡出土土器観察表
4号住居 10-1	壺	法量 口径15.4cm 頸部10.1cm 現存率 口縁部 頸部 胴部1/4 せいけい 外面口縁部ヨコナデ→荒い縦位のヘラナデ 頸部ヨコナデ 胴上半ハケ状工具の三条一単位の条線3単位及びその下に同一工具と考えられる3条一単位の波状文が4単位 内面口縁部横位の密なハラミガキ 胎土 赤橙色粒混入 焼成 良好 色調 橙色 出土状態 焼土中で出入口付近接合
4号住居 10-12	高杯	法量 底径12.7cm 接合部径4.1cm 現存率 脚部2/3 せいけい 外面脚上半は縦位のケズリ下半はヨコナデ 内面接合部カキトリ下半ヨコナデ 胎土 密 焼成 普通 色調 橙色 出土状態 焼土中
4号住居 10-2	結合器台	法量 口径18cm 接合部径3.5cm 現存率 杯部のみ せいけい 外面 口縁部ヨコナデ→斜位ヘラナデ 複合口縁折口は指頭押圧整形 中位胴ヨコナデ 受部指頭整形→縦位ヘラナデ 内面ナデ→横位ヘラナデ 胎土 赤橙色粒混入 焼成 良好 色調 橙色 出土状態 出入口焼土中3地点接合
4号住居 10-4	高杯	法量 底径15cm 現存率 脚部下半1/3 せいけい 外面 ナデ→縦位ヘラナデ 内面 ヨコナデ 胎土 赤橙色粒混入 焼成 良好 色調 橙色 出土状態 床直上と焼土中接合 備考 10-3に似る
4号住居 10-5	高杯	法量 推定口縁部径14.2cm 底径9.4cm 現存率 杯部1/6脚部4/5 せいけい 杯部 外面ヨコナデ→縦位ヘラナデ 内面ヨコナデ→縦位ヘラナデ→口唇ヨコナデ 脚部 外面 ハケ調整→上半小単位ヘラケズリ→中位下部ハラミガキ 胎土 赤橙色粒を含む 焼成 普通 色調 橙色 出土状態 焼土中と遺構検出時 備考 杯部と脚部は同一個体の可能性が高い。脚は2次加熱を受け内面は荒れている
4号住居 10-6	器台	法量 口径 9.4cm底径10.5cm器高8.5cm 現存率 脚部一部欠損 せいけい 受部 内面ミガキ 外面ヨコナデ 接合部 外面横位ケズリ 脚部 外面 縦位ヘラミガキ 内面 ヨコナデ 胎土 赤橙色粒混入密 焼成 良好 色調 淡赤褐色 出土状態 焼土中出入口付近3地点接合 備考 透し穴3方向 受け部摩耗が激しい
4号住居 10-7	器台	法量 口径 6.9cm 頸部 3cm 底径 9.2cm 器高 7.6cm 現存率 脚部一部欠損のみ せいけい 受部外面ヨコナデ→斜位ナデ 内面ナデ 脚部外面上半縦位の若干のケズリ→ヨコナデ 胴下半縦位のミガキ→ヨコナデ 胎土 密砂っばい 焼成 普通 色調 橙色 備考 透し穴3方向

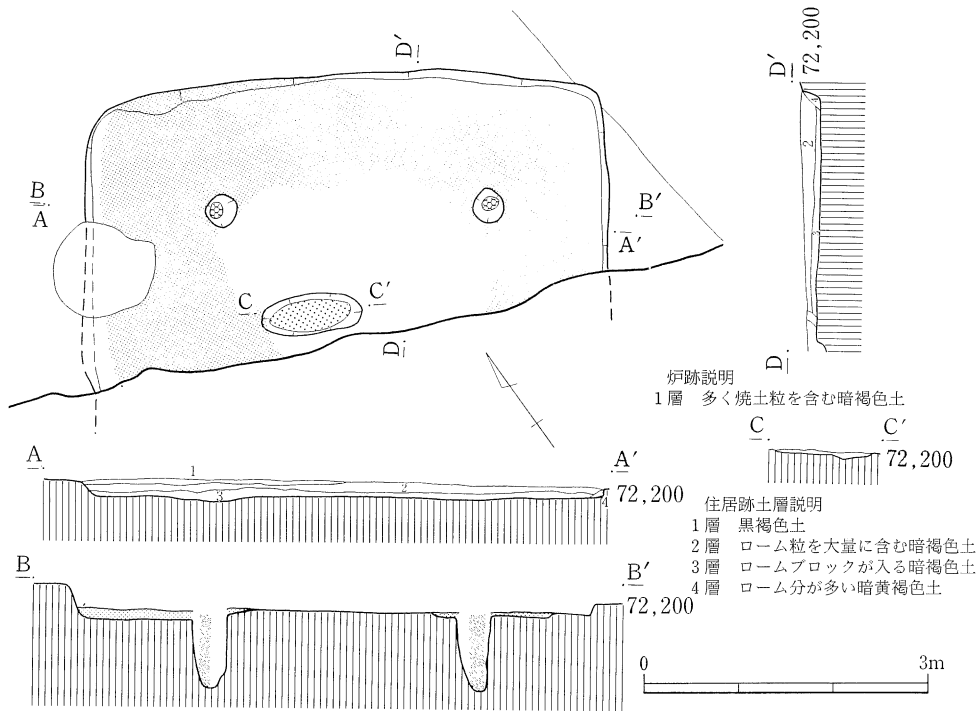


第10図 4号住居跡



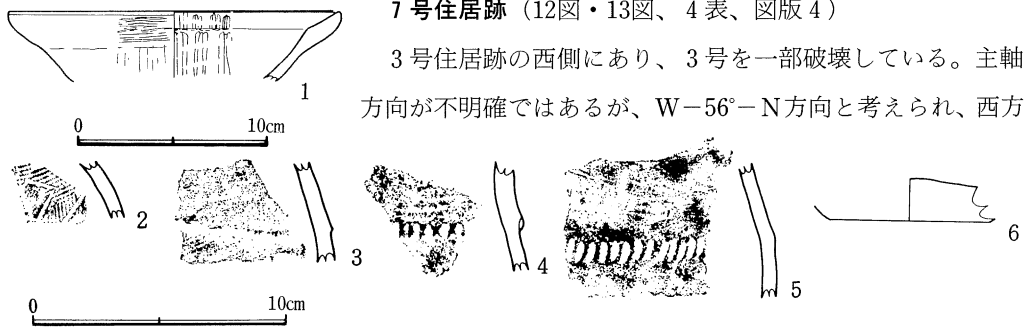
第11図 4号住居跡出土土器（1～11・13：1/4，12・14～17：1/3）

遺構挿図番号		器種	第3表 4号住居跡出土土器観察表	
4号住 10-8	甕台	法量 口径7.0cm 現存率 受部2/3	せいけい 外面	ヘラナデ→ヨコナデ 内面 カキトリに似る調整→ヨコナデ 胎土 砂質若干の赤橙色粒を混入 焼成 普通 色調 淡褐色 出土状態 覆土上部
4号住 10-9	?	法量 底径3.1cm 現存率 底部胴下半部	せいけい 内外面	ヘラミガキとナデ 胎土 密赤橙色粒若干混入 焼成 良好 色調 茶褐色 出土状態 覆土中 備考 ミニチュア土器の底部
4号住 10-10	甕	法量 推定口径16.6cm 現存率 口縁部1/5	せいけい 外面	口縁部ヨコナデ 頸部ハケ整形→ヨコナデ 胴部上半ハケ 内面口唇から頸部ヨコナデ 胴部上半ヨコナデ→ヘラナデ 胎土 密 焼成 良好 色調 外面黒色のスス付着褐色 内面 淡灰黄色 出土状態 覆土 備考 ハケは鋭く深い
4号住 10-11	甕	法量 推定口径21.4cm 現存率 口縁部1/5	せいけい 外面口縁から頸部ヨコナデ	胴部上半ハケ 内面口唇から頸部ハケ→ヨコナデ 胴上半ナデ 胎土 赤橙色粒多く混入 焼成 良好 色調 外面黒スス付着 内面 赤褐色 出土状態 覆土上部 備考 ハケ目は浅い
4号住 10-13	高杯	法量 推定口径20.8cm 現存率 口縁部1/10	せいけい 内外面ともナデ	荒れている 胎土 若干の砂が入る 焼成 普通 色調 赤褐色 出土状態 床直上 備考 2次加熱を受け器面は荒れている
4号住 10-14	壺	現存率 胴部片	せいけい 外面	単筋RL-LR 羽状縄文と縄文R3段のS字状結節文間ヨコナデ 無文部は赤彩 内面荒れて剥落 胎土 砂質で密 焼成 普通 色調 黄褐色 出土状態 焼土中
4号住 10-15	壺	現存率 頸部片	せいけい 外面	頸部接合部に縦位の棒状工具のキザミ他はナデ 内面横位のヘラナデ 上半赤彩 胎土 密 焼成 普通 色調 褐色 出土状態 覆土中
4号住 10-16	甕	法量 底径4.2cm 現存率 底部のみ	せいけい 外面	底部ナデ 胴下部ヘラナデ 内面ヘラミガキ 胎土 橙色粒多く含む 焼成 普通 色調 外面黒内面淡褐色 出土状態 覆土中
4号住 10-17	甕	法量 底径6.4cm 現存率 底部より胴下半	せいけい 外面	底部木葉痕→ナデ 胴部 縦位ハケ→ナデ 内面黒色スス状物付着で観察不可能 胎土 赤橙色粒含み密 焼成 普通 色調 灰褐色 出土状態 覆土焼土中床直上と3地点接合だが入り付近である。

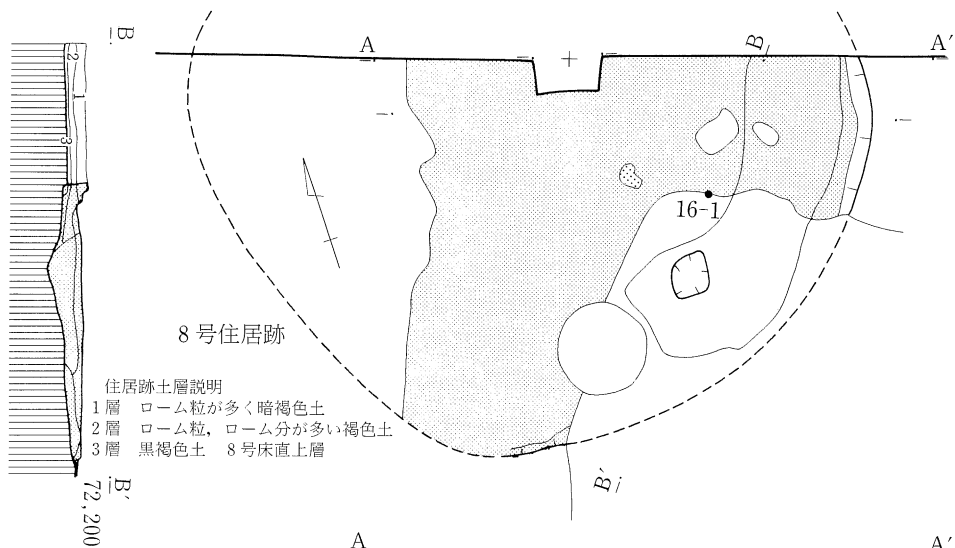


第12図 7号住居跡

遺構 挿図番号	器種	第4表 7号住居跡出土土器観察表
7号住 13-1	鉢	法量 推定口径17.4cm 現存率 体部上位1/6 せいけい 外面口縁部ヨコナデ 内面口縁部ミガキ 口縁部下荒い縦位のヘラナデ 胎土 橙色粒子を多く含む 焼成 普通 色調 外面灰褐色 内面赤 彩 出土状態 床直上
7号住 13-2	壺	せいけい 外面単節LR施文→沈線区画→区画外磨消赤彩 内面ヨコナデ 胎土 密 焼成 良好 色調 橙色 出土状態 覆土 備考 小破片であるが重山形文
7号住 13-3	甕	せいけい 外面 斜位のナデ輪積痕を残す 内面 横位ヘラミガキ 胎土 灰黒色の粒を混入 焼成 密 色調 外面灰褐色 内面灰黒色 出土状態 貼床下
7号住 13-4	甕	せいけい 外面ヨコナデ輪積痕にキザミ 内面ヨコナデ→ミガキ 胎土 淡橙色粒多く混入 焼成 普通 色調 外面黒色内面淡灰色 出土状態 床直上
7号住 13-5	甕	せいけい 外面ヨコナデ輪積痕を縄文原体のキザミで消す 内面横位のミガキ 胎土 密 焼成 良 好 色調 淡橙色 出土状態 床直上
7号住 13-6	?	法量 推定口径 6.6cm せいけい 外面底部ヘラナデ 内面ナデ 胎土 赤橙色粒混入 焼成 普通 色調 灰褐色 出土状態 覆土

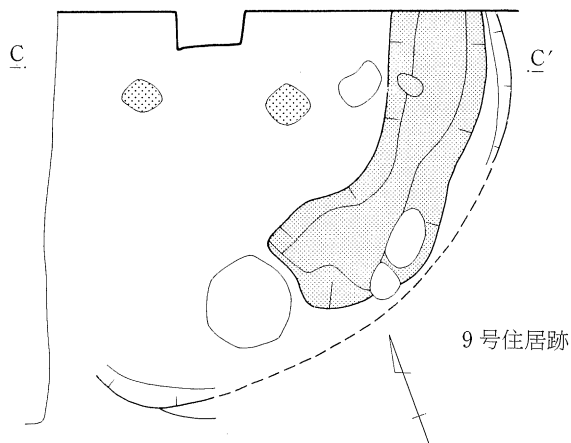
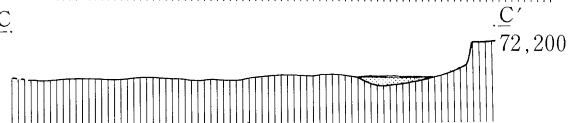
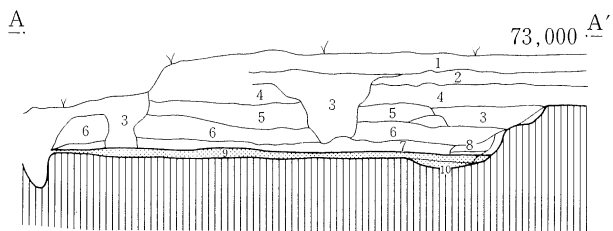


第13図 7号住居跡出土土器



- 住居跡土層説明
- 1層 ローム粒が多く暗褐色土
  - 2層 ローム粒、ローム分が多い褐色土
  - 3層 黒褐色土 8号床直上層

- 住居跡土層説明
- 1層 灰褐色耕作土
  - 2層 黒褐色土
  - 3層 攪乱層
  - 4層 ローム粒を含む褐色土
  - 5層 ローム粒、焼土粒を含む褐色土
  - 6層 ローム粒を含む褐色土
  - 7層 黒褐色土
  - 8層 暗褐色土
  - 9層 ロームブロック 8号住居跡の貼床形成土
  - 10層 黄褐色ロームと黒褐色土

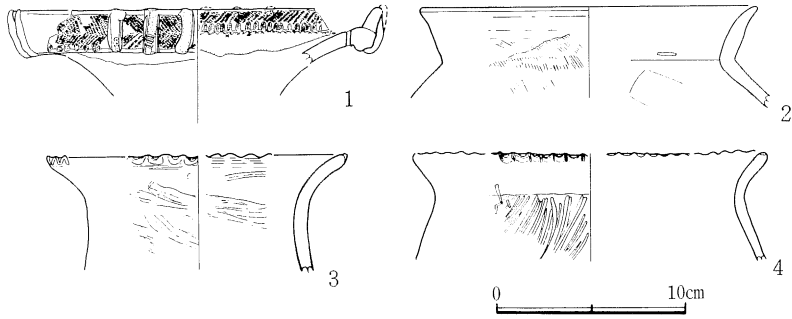


向と考えられる。貼床は中央部を残し浅く掘り窪められ、炉は地床炉で東西に細長い。一辺 5.7m位で南側は道跡でカットされている。8号住居跡の上に構築されたため、弥生時代の遺物を混入するが、五領式期後半と考えたい。

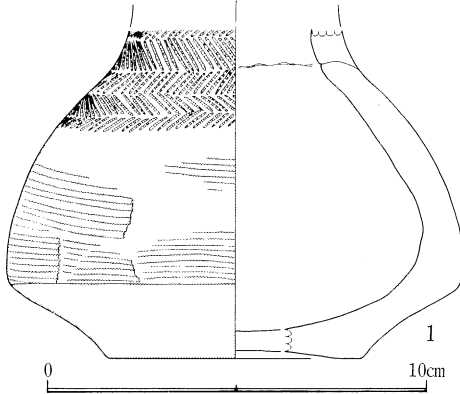
**8号住居跡** (14図～16図, 5表, 図版5) 隅丸方形プランと考えられるが、炭窯に大きく破壊されている。主軸はW-27°-Nで推定は8m程である。支柱穴は検出されず、堅く締まった貼床は7号住部分は無かった。遺物は北東側に片寄って出土し、廃

第14図 8号・9号住居跡





第15図 8号住居跡出土土器

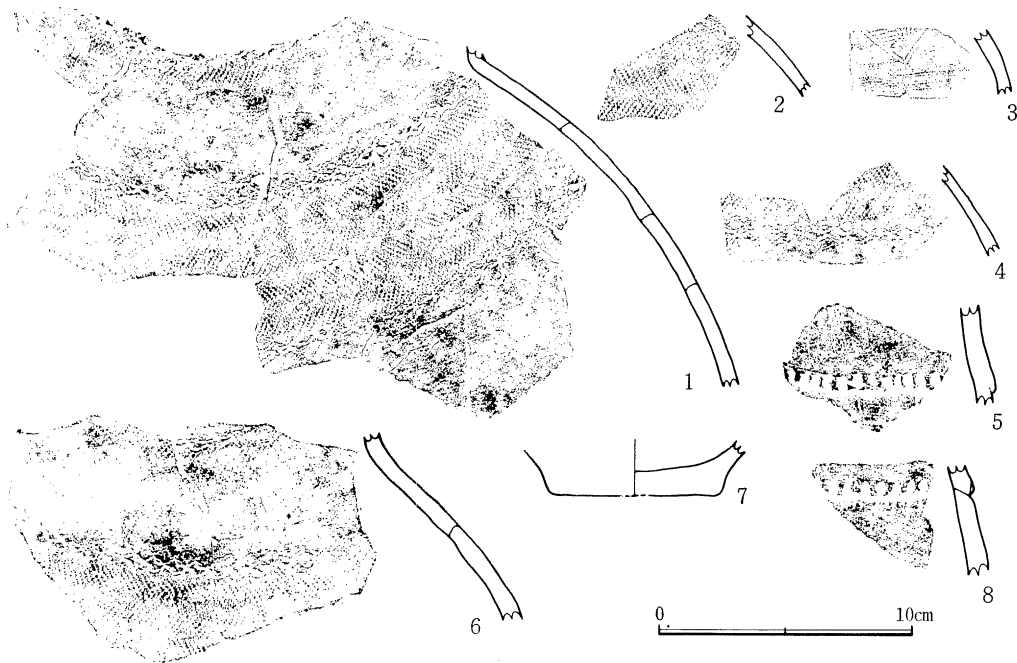


第16図 8号住居跡出土土器 (菊川式)

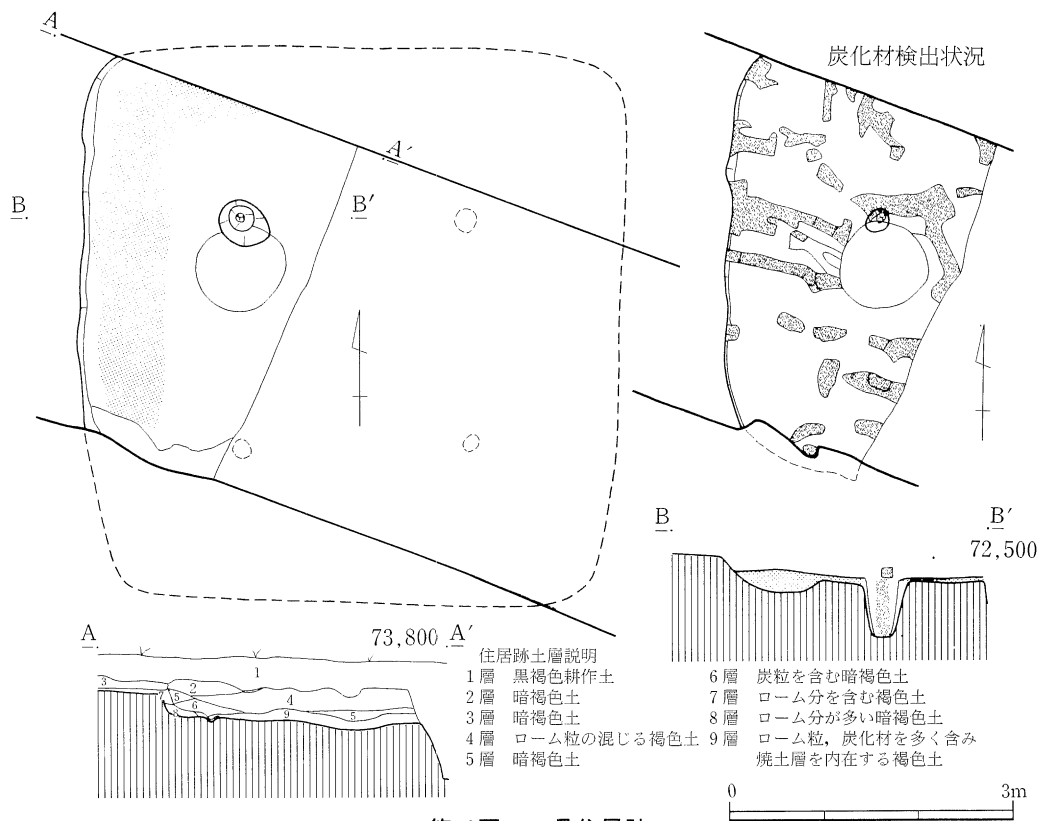
棄されたかのような  
である。菊川式の  
壺はその中であっ  
た。9号住居跡は  
全く8号のプラン  
の下にあり、建替  
えと考えたい。9  
号の床に約5cm厚

の貼床を積んで8号の床としている。9号住床  
面には、2ヶ所の焼土の堆積があり、8号住床  
面にも1ヶ所の焼土堆積があった。いずれも炉  
と考えたいので、生活面は有している。9号は  
壁に沿って帯状の貼床が見られる。貼床除去の  
段階で攪乱でない8号の斜行ピットを確認した。  
8・9号住居跡は、遺存状態が悪くまた調査区  
外が多いことから不明な点が多い。時期は出土  
品等から、弥生時代後半でも末と考えたい。

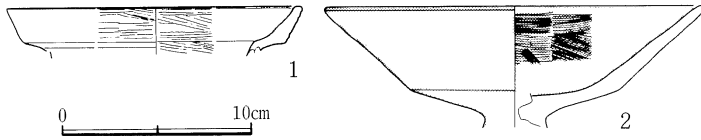
遺構 挿図番号	器種	第5表 8号, 9号住居跡出土土器観察表
8号住 15-1	壺	法量 推定口径19.4cm 現存率 1/6 以下 せいけい 外面単節RL・LRの羽状縄文を横位施文→縄文原体でキサミ・口唇上をヨコナデ→3本の棒状突起を垂下→ヘラ状工具で突起上を横位にキサミ頸部ヨコナデ推定2対9単位の内面より外面鉛直方向へ穿穴がある 内面口唇下単節LRの斜縄文→縄文原体のキサミその下に結節文がある 頸部はヨコナデ赤彩 胎土 砂質白色粒多量に混入 焼成 普通 色調 灰褐色 出土状態 覆土
8号住 15-2	甕	法量 推定口径17.4cm 現存率 1/10 せいけい 外面斜位のハケ→ヨコナデ 頸部のみハケ残す 内面ヨコハケ→ヨコナデ 胎土 白色粒混入 焼成 普通 色調 外面黒 内面淡褐色 出土状態 覆土
8号住 15-3	甕	法量 推定口径15.7cm 現存率 1/6 せいけい 外面口唇部はナデ→棒状工具表裏押捺 頸部胴部は擦痕が残るナデ 内面ヨコナデ 胎土 橙色粒砂混入 焼成 普通 色調 灰褐色 出土状態 覆土
8号住 15-4	甕	法量 推定口径18.5cm 現存率 1/8以下 せいけい 口唇上棒状工具によるキサミ 外面口縁部ヨコナデ 頸部下荒いヘラナデ 内面 横位ヘラナデ 胎土 白色粒ローム粒子混入 焼成 普通 色調 外面黒色 内面淡褐色 出土状態 覆土
8号住 16-1	壺 (菊川式)	法量 頸部5.6cm 胴部径12cm 底径6.4cm 現存率 口縁部欠損他均 せいけい 外面頸部～胴上半擬縄文羽状効果を意図するクシ状工具刺突を五段 胴部は横位のハケ痕 内面ヨコナデ 胎土 砂質白色小礫、雲母が入る 焼成 普通 色調 胴下半より赤彩、外面淡橙色 内面灰黒色 出土状態 覆土 備考 形体、施文より東遠江の菊川式と考えられる。胎土も他のものと異なり搬入品の可能性がある。出土状況は他と同じでやや床面より浮き遺物の集中地点内で検出している。
8号住 17-1・2 4・6	壺	法量 推定胴径40cm 推定頸径11cm 現存率 頸部下胴上半1/3 せいけい 外面 頸部単節LR斜縄文→その上部に結節文 無文帯横位ヘラナデ→赤彩 胴部上段から結節文・単節縄文をRL→LR→RL→LRと4段羽状効果→結節文 ヘラナデ→赤彩 内面ナデ 胎土 赤橙色粒混入密 焼成 普通 色調 淡橙色 出土状態 覆土 備考 破片数が多いが胴部片のみ
8号住 17-3	壺	せいけい 外面横位ミガキ→単節RL縦位・横位施文→沈緑で区画→ナデ 内面 ヨコナデ 胎土 密 焼成 良好 色調 外面灰褐色 内面橙色 出土状態 覆土
8号住 17-5	甕	せいけい 外面ヨコナデ→輪積痕を縄文原体で押捺キサミ 内面ヨコナデ 胎土 白色粒子若干混入 焼成 普通 色調 外面黒褐色 内面暗褐色 出土状態 覆土
8号住 17-7	壺	法量 推定底径6cm せいけい 内外面ともナデ 胎土 白色粒子混入 焼成 普通 色調 外面赤褐色 内面黄白色 出土状態 覆土
9号住 17-8	甕	せいけい 外面ヨコナデ→輪積痕を縄文原体で押捺キサミ 内面ヨコナデ 胎土 橙色粒混入密 焼成 普通 色調 外面橙色 内面灰褐色 出土状態 8号住居跡貼床下



第17図 8号・9号住居跡出土土器



第18図 11号住居跡



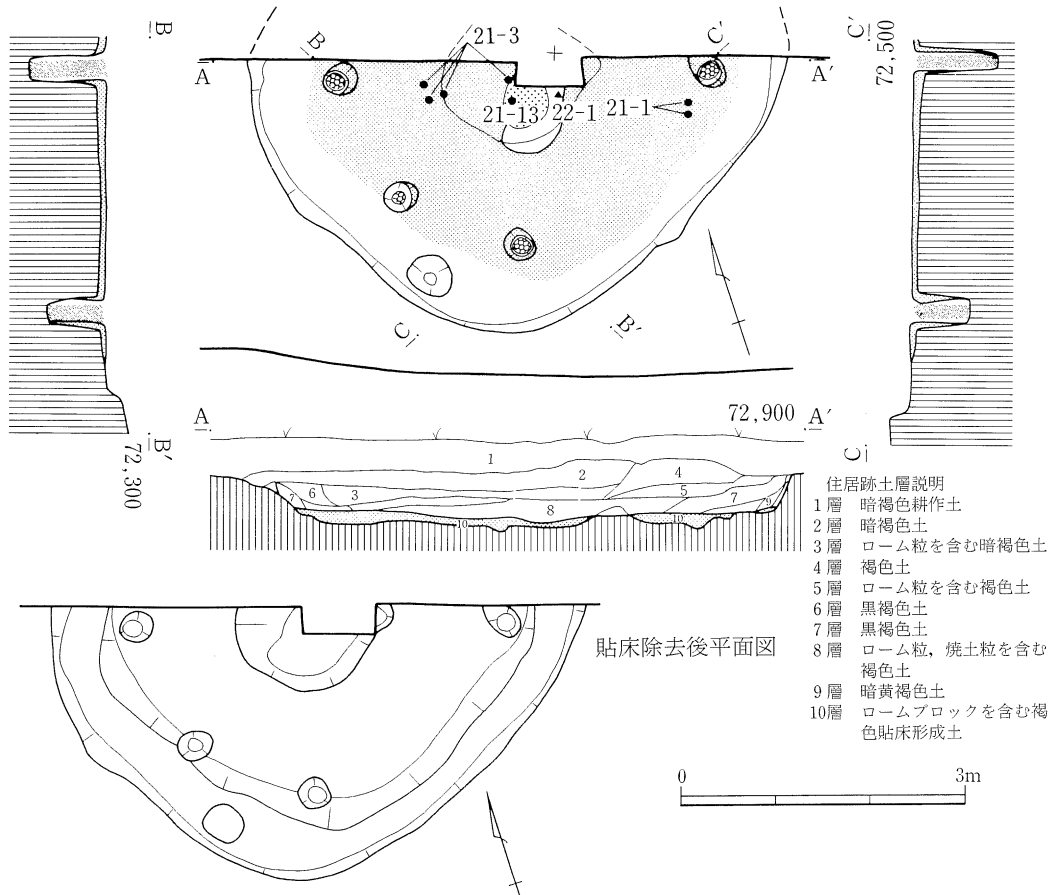
第19図 11号住居跡出土土器

11号住居跡 (18図・19図, 6表, 図版6)

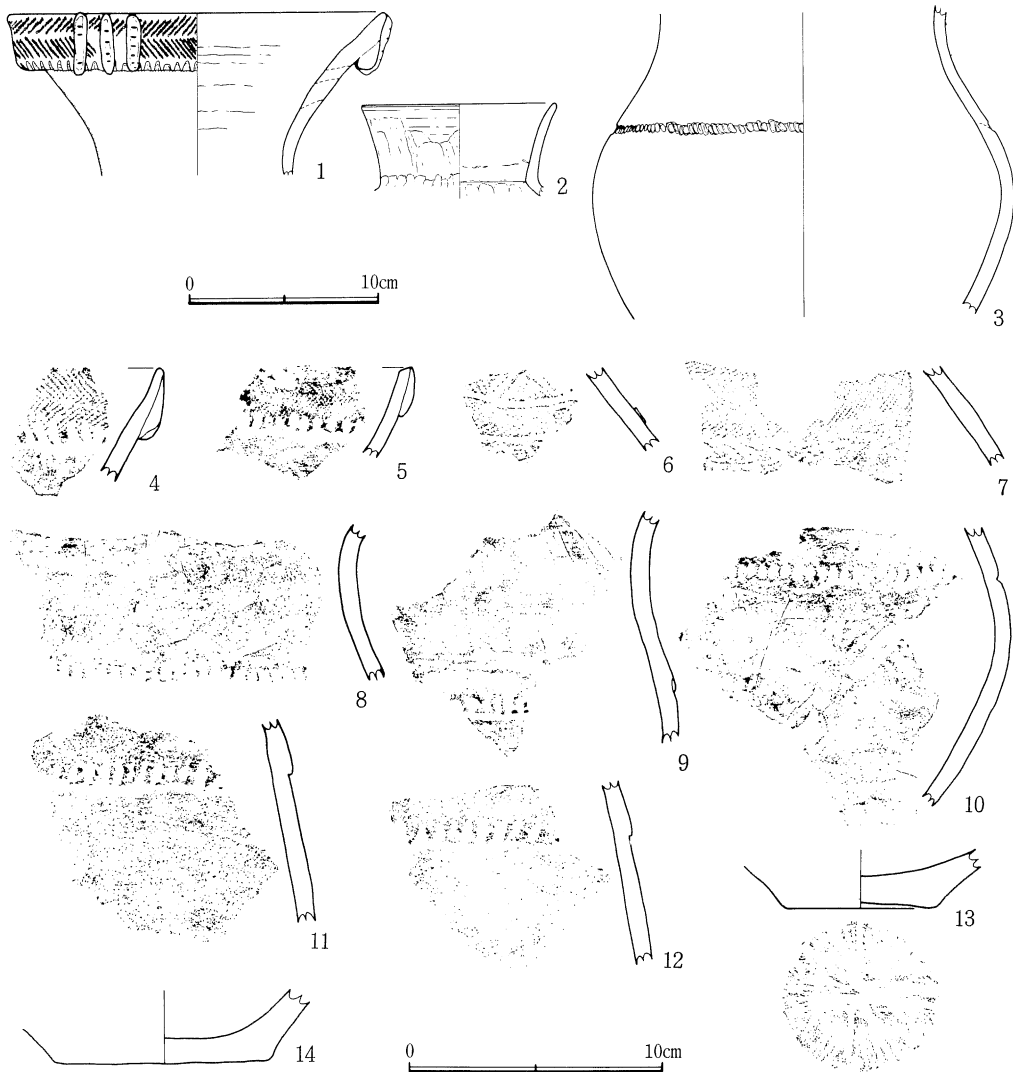
10号溝・炭窯に大きく破壊されている。恐らく

主軸は、W-2°-N、一辺5.5m程の規模を有すると思われる。焼失住居で炭化材が良好に遺存していた。その中に柱痕直上に直立する径10cmの炭化材があり、柱の残存部と考えられる。貼床は壁に沿って帯状に巡ると思われる。遺物は少なく10号溝出土遺物も検討した結果、時期は五領式期後半と考えたい。

遺構挿図番号	器種	第6表 11号住居跡出土土器観察表
11号住 19-1	壺	法量 推定口縁部径15.5cm 現存率 口縁部のみ 1/8以下 せいけい 外面 ヨコハケ→ヨコナデ 頸部ヨコナデ 口唇上に2本1対で浅い線状のキザミがある。内面 ヨコナデ→ナデ 胎土 白色粒子黒色粒若干混入 焼成 良好 色調 淡黄褐色 出土状態 覆土
11号住 19-2	高杯	法量 推定口縁部径19.8cm 現存率 1/6以下 せいけい 外面 ハケ整形→ヨコナデの赤彩 脚接合部ヘラ整形→ナデ 内面口唇部付近ヨコハケ以下斜位のハケ→ヨコナデ→赤彩 胎土 密 色調 淡黄褐色 出土状態 10号遺構より出土だが、接合の結果11号住、所屬と考えられる。



第20図 12号住居跡



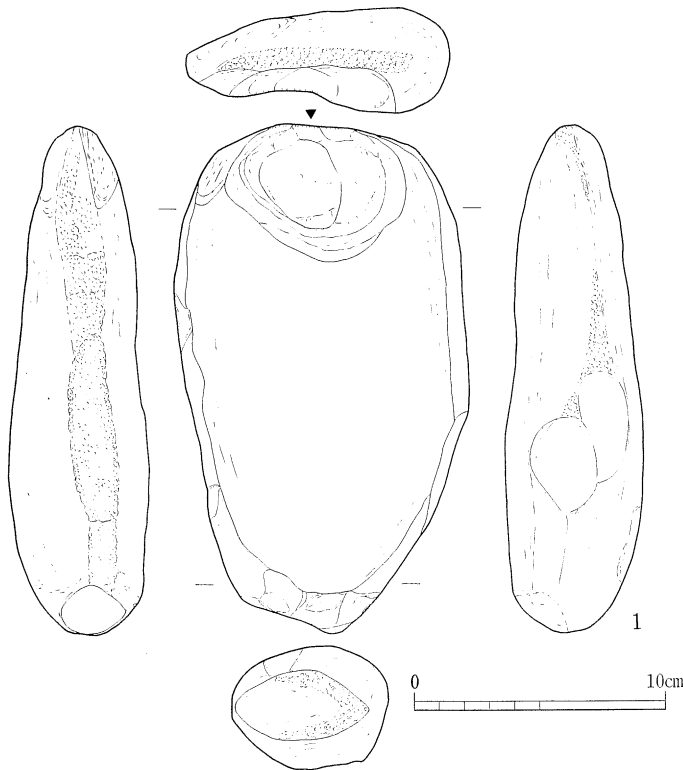
第21図 12号住居跡出土遺物 (1~3 : 1/4 , 4~14 : 1/3)

12号住居跡 (20図・21図, 7表, 図版7)

調査区域西端の住居跡で西からの谷より50m程入っている。主軸はN-57°-Eで規模は5.5m程である。貼床は壁沿いを残し、中央の大部分を掘り窪めている。住居跡中央に炉があるが、半分は調査区外で不明な点が多い。支柱穴は恐らく4本で1本の斜行ピットが付属する。南東

遺構 挿図番号	器種	第7表 12号, 13号住居跡出土遺物観察表
12号住 21-1	壺	法量 推定口径20cm 推定頸径10cm 現存率 口縁部1/3 せいけい 外面複合口縁部単節LR・R Lの羽状縄文 折り返し部はハケ目原体のキザミがある。棒状突起は3本1対で突起上に3本のキザ ミがある 頸部はヨコナデ→赤彩 内面は荒れて剥落している 胎土 赤色粒多量混入粗い 焼成 普通 色調 橙色 出土状態 覆土下部 備考 棒状突起は3本1単位で4単位と考えられる
12号住 21-2	壺	法量 推定口径10cm 現存率 口縁部1/2 せいけい 外面 口唇部ヨコナデ以下強い縦位のヘラナ デ頸部はヘラ押し痕が残る 内面ヨコナデ 頸部取付け部指頭圧痕 胎土 橙色粒混入 焼成 良好 色調 外面淡橙色 内面 灰褐色 出土状態 覆土

12号住 21-3 9・10	甕	法量 推定頸部径15cm 接合部径19.7cm 胴径22.2cm 現存率 1/4 せいけい 外面頸部～胴部擦痕を残す横位整形→ヨコナデ 輪積痕に先端楕円状工具による押圧 胎土 若干の砂粒を含む 焼成 普通 色調 外面暗褐色スス付着 内面橙色 出土状態 覆土下部と中央のピット内が接合
12号住 21-4	壺	せいけい 外面複合口縁部単節R LとL Rの羽状縄文→下端縄文原体押捺キザミ以下ヘラミガキ→赤彩 内面横立ヘラミガキ→赤彩 胎土 橙色粒混入 焼成 普通 色調 橙色 出土状態 覆土下部
12号住 21-5	壺	せいけい 磨耗が激しいが口縁部は複合口縁で外面に羽状縄文があり下端に縄文原体のキザミ以下ナデ 内面はヨコナデ 胎土 赤橙色粒混入 焼成 普通 色調 褐色 出土状態 覆土下部
12号住 21-6	壺	せいけい 外面単節R L縄文→沈線区画→三角区内赤彩・単節L R縄文→沈線区画→ナデ→貼付文→四点針状工具刺突→赤彩・沈線区画→平行四辺区画内赤彩 内面 ヨコナデ 胎土 砂粒赤色粒混入 焼成 良好 色調 灰褐色 出土状態 覆土 備考 住居内では同一類の破片なし
12号住 21-7	壺	せいけい 外面単節L R・R L・L R三段の羽状縄文→円形赤彩・結束文以下ヨコナデ→赤彩 内面大妻に荒れ剥落 胎土 赤橙色粒混入 焼成 普通 色調 褐色 出土状態 床直上
12号住 21-8	甕	法量 推定キザミ部径19cm せいけい 外面斜位のケズリ状ナデ、輪積部分縄文原体の押捺 内面ヨコミガキ 胎土 粗橙色粒混入 焼成 普通 色調 褐色 出土状態 中央ピット内
12号住 21-11・12	甕	せいけい 内外とも器面が荒れている 輪積痕明瞭輪積痕上に荒い縄文原体押捺以下ナデ 内面ヨコミガキ 胎土 若干の砂粒混入 焼成 普通 色調 淡灰褐色 出土状態 覆土と中央ピット接合
12号住 21-13	?	法量 底径 6.3cm せいけい 外面ナデ 内面ヘラミガキ 胎土 赤橙色粒混入 焼成 良 色調 赤橙色 出土状態 覆土下部 備考 破損後砥石に転用三方向割口磨耗 底部3条以上の条線状磨痕
12号住 21-14	甕	法量 底径 8.6cm せいけい 外面ヘラ整形→ナデ 内面黒色物質付着 胎土 橙色粒若干 焼成 普通 色調 外面淡黄橙色 出土状態 覆土上部
12号住 22-1	台石	法量 長軸203mm 短軸115mm 最大厚55mm 重量1970g 使用痕は6面中5面に見られる側面は敲打痕 一端部は敲打のため剥離面がある 出土状態 炉付近にやや浮いて出土 備考 使用痕顯著枕石転用
13号住 24-1	椀	法量 口径14.3cm 胴部径16.2cm 現存率 1/4以下 せいけい 外面複合口縁部口唇上単節縄文施文・単節R L・L Rの羽状縄文→一部ナデ縄文磨り消し→下端部縄文原体による刺突及び押捺→円形貼付文2個→円形貼付文に穿孔以下横位のミガキ→赤彩 内面横位のミガキ→赤彩 胎土 赤褐色粒混入密 焼成 普通 色調 褐色 出土状態 床上6cm 備考 両側断面にタール状物質付着

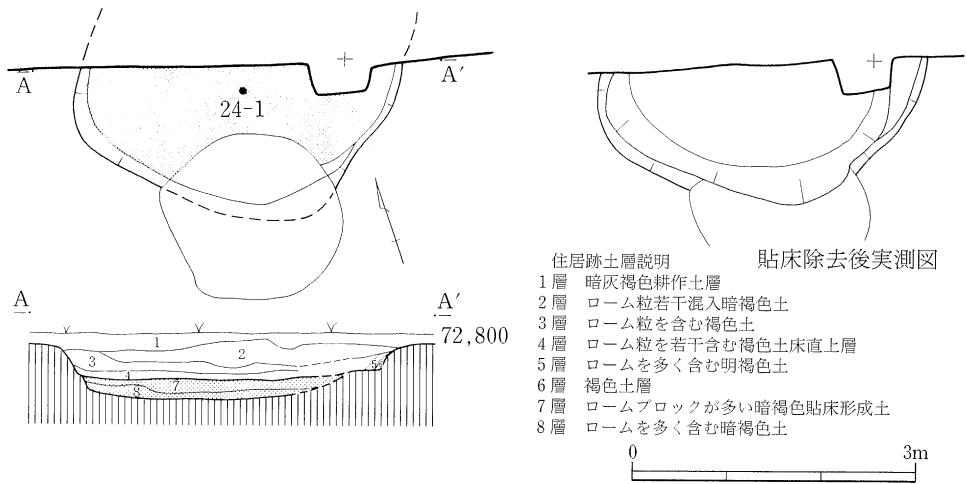


第22図 12号住居跡出土石器

隅には貼蔵穴がある。貼床を除去すると、炉の下には一辺1mの方形状の落ち込みがあったが性格は不明である。遺物は炉を中心に散布しているが完形になるものはなかった。炉には敲打痕を有する枕石になる石器が付属していた。出土遺物・住居形態から弥生時代後半と考えられる。

13号住居跡 (23図・24図・7表, 図版7)

12号の東4mに位置し、小型の柱穴を有しない住居で隅丸方形である。主



第23図 13号住居跡

軸は12号と同方向に向くと思われる。貼床は軟弱であり床全面を覆う。遺物はやや浮いた状態で出土し、炉は調査区外にあると推定される。南東隅は木根抜きの関係で広く攪乱されていた。遺物は図示したものは1点だが、他に甕の破片と摩耗痕の著しい軽石片が出土している。

第24図 13号住居跡出土土器

1号土壙 (25図, 図版8)

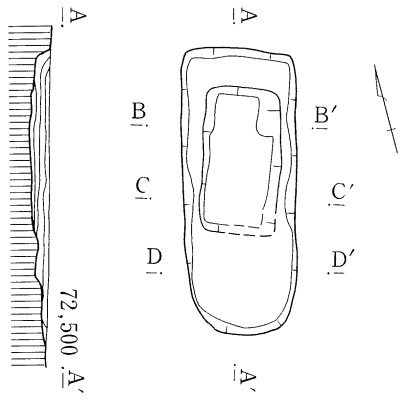
1号土壙は長軸がN-13°-Eの土壙墓と考えているものである。2.3m×0.9mの掘り込みの中に1.2m×0.6m程の一段低い面を有する。出土遺物は五領式期と考えられる小片10数点だがいずれも器形のわかるものはなく、埋納されたものはない。

6号溝 (25図, 図面8)

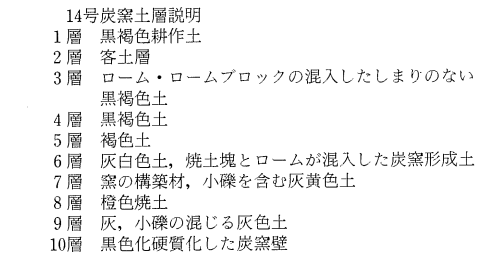
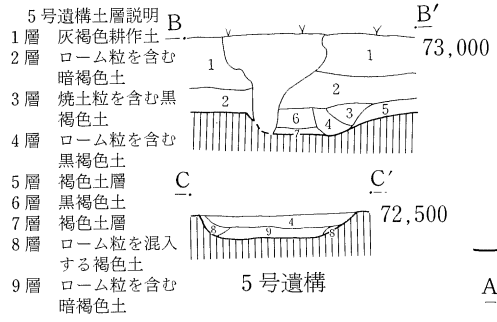
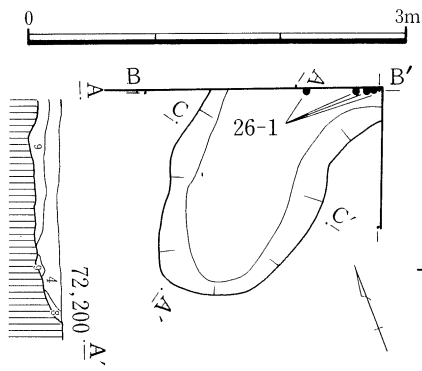
遺構プラン確認の際、1号土壙に破壊されていると判断した溝状の遺構だが、性格は全く不明である、2個1対のピットが斜行して3列ある。遺物は弥生時代の壺と思われる小片が2点出土している。

5号土壙 (25図, 図版8)

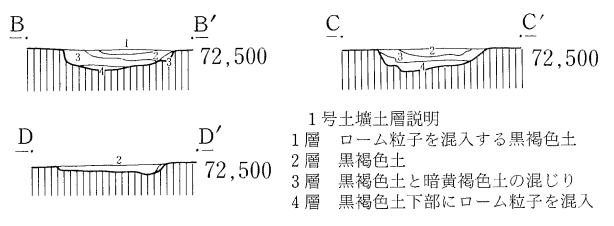
4号住居跡の東に近接して存在する溝状の遺構である。調査区外を含み完掘されていないが調査区内では長軸 2.2m、幅 1.2m、深さ0.25m程である。遺物は豊富で、壺、甕、高杯まであるが図示は2点、図版中1点載せた。いずれも覆土中で破片が多い。長軸方向はN-39°-Eで4号住居とは切り合わないと思われる。性格は不明だが、調査例が近年増加する五領式期の溝状の遺構があるかもしれない。住居群の希薄な地区に1号・5号・6号とあるのは、集落の構成のなかで意味があることなのだろう。番後台遺跡では住居跡と溝状遺構が伴って検出され、多数の出土遺物を報告している。



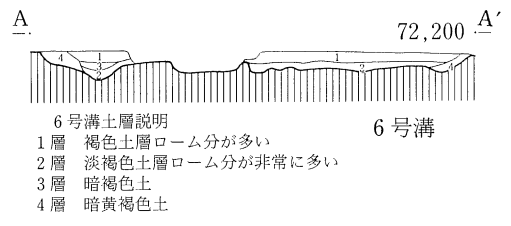
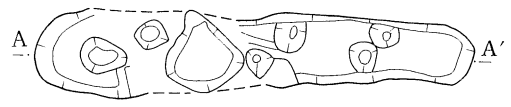
1号土坑



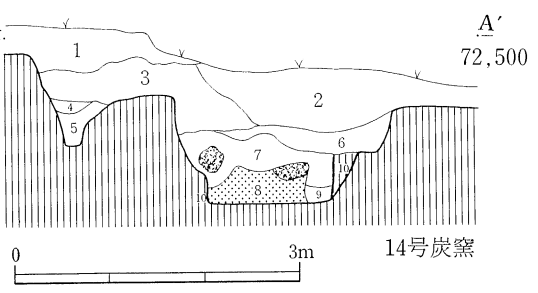
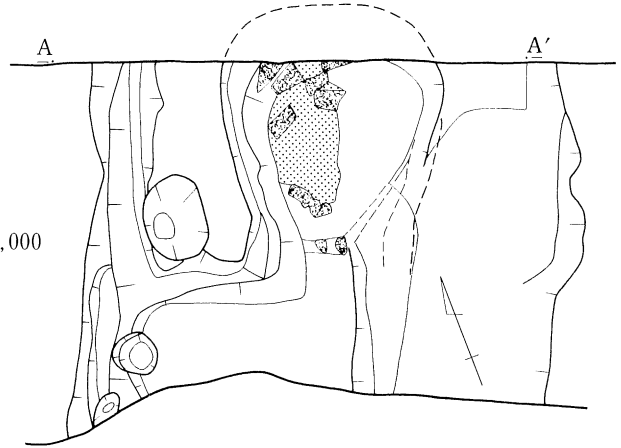
- 14号炭窯土層説明
- 1層 黒褐色耕作土
  - 2層 客土層
  - 3層 ローム・ロームブロックの混入したしまりのない黒褐色土
  - 4層 黒褐色土
  - 5層 褐色土
  - 6層 灰白色土、焼土塊とロームが混入した炭窯形成土
  - 7層 窯の構築材、小礫を含む灰黄色土
  - 8層 橙色焼土
  - 9層 灰、小礫の混じる灰色土
  - 10層 黒色化硬質化した炭窯壁



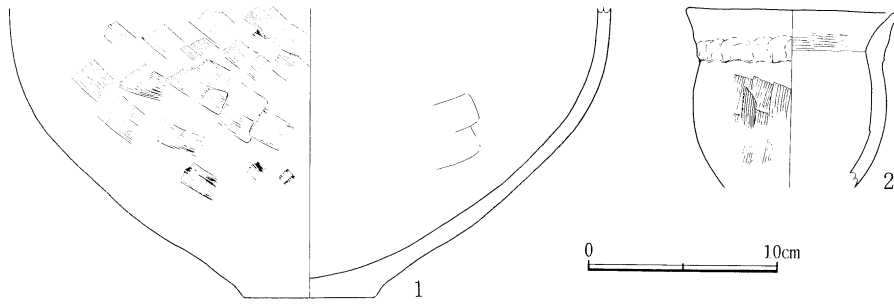
- 1号土坑土層説明
- 1層 ローム粒子を混入する黒褐色土
  - 2層 黒褐色土
  - 3層 黒褐色土と暗黄褐色土の混じり
  - 4層 黒褐色土下部にローム粒子を混入



- 6号溝土層説明
- 1層 褐色土層ローム分が多い
  - 2層 淡褐色土層ローム分が非常に多い
  - 3層 暗褐色土
  - 4層 暗黄褐色土



第25図 各種遺構



第26図 5号遺構出土土器

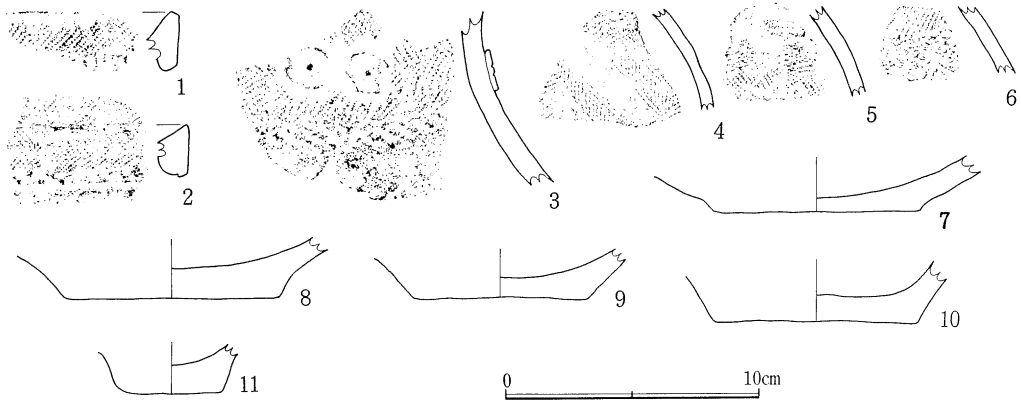
遺構挿図番号	器種	第 8 表 5 号 土 壇 出 土 土 器 観 察 表
5号土壇 26-1	壺	法量 胴部径31.5cm 底径 6.9cm 現存率 胴下半部まで せいけい 外面浅く極めて細いハケが斜位に入る底部はヘラで整形 内面横位のヘラ整形 胎土 茶褐色粒を多く含む 焼成 普通 色調 外面淡白褐色 内面橙色 出土状態 遺構確認面2層下面に散乱
5号土壇 26-2	甕	法量 口径11.2cm 頸部 9.8cm 胴部径10.2cm 現存率 1/4以下 せいけい 外面口縁部指頭押痕が残る 調整輪積痕残存・胴部縦位のハケ→ヨコナデ 内面口縁部指頭調整→ヨコハケ以下胴部ヨコナデ 胎土 茶褐色粒含む 焼成 良好 色調 暗橙色 出土状態 覆土
5号土壇 図版11右 から2つ目	壺	せいけい 外面単節RL・LR羽状縄文・結節文2段・ヘラナデ・結節文2段・単節RL・LR・RL羽状縄文・結節文2段・山形文区画単節RL・LR羽状縄文→沈線で区画→区画内磨り消し 内面ヨコナデ 胎土 茶褐色粒混入 焼成 良好 色調 淡灰褐色 出土状態 覆土

14号炭窯 (25図, 図版8)

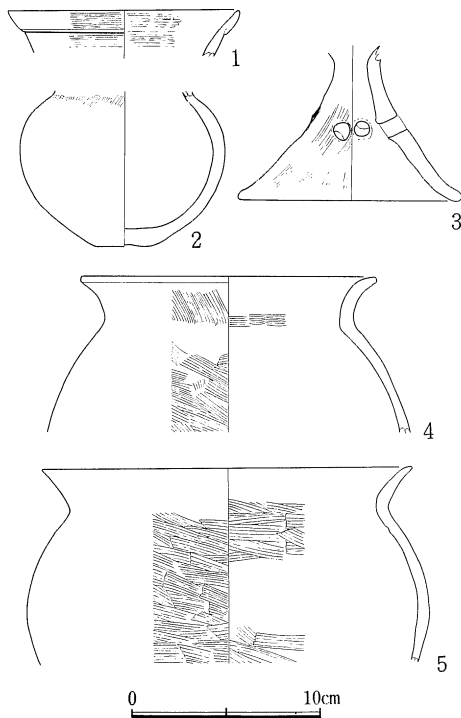
炭窯は調査区中央、農道の地下にあった。窯体は平面馬蹄形を呈し、内法での規模は推定長軸 2.2m・短軸 1.6mを測る。確認面から窯底までの深さ 1.1mであり、推定ではローム層を 1.6m程掘り込んでいると考えられる。窯壁は現在残っている部分は、ハードロームそのままの壁面で火熱によって黒色硬質化している。又内部は赤化している。断面の観察では窯壁の左右は40cm程は垂直に立っており、窯体の内法高は 1 m程になると考えられる。断面図の 6層～9層は炭窯が廃絶後崩壊して落ち込んだものと思われる。2層・3層には現代のものに近いものと思われる、湯呑み・瓦等の破片が混在していた。7層・8層には、窯の構築材と考えられる成田層付近で産出するやや硬質化した砂質の粘土ブロックが、長い立方形となって焼土等に混じって検出された。炭窯は上記の様にかかなり深く構築されている。これは現在の鶴舞牛久線が、富士台の坂を下るため、路面を掘り下げ切り通し状にしたために。南が開口したからではないかと考えられる。第3図において10号遺構とした溝は、炭窯に雨水等が流れ込むのを防ぐ排水溝と見られる。恐らく炭窯の東西北面を廻らす形になっていたと思う。

炭窯からの出土品から、構築は明治以降であり明治より新しいと考えた方がよいだろう。旧街道は、鶴舞城を出て富士台を下りすぐに北に折れて、現富士台青年館の前を抜けてから台地を下り、真ヶ谷から新巻・川在に抜けるコースをとる。富士台は鶴舞の防衛上重要な地点で、西からの最初の関所的存在である。そのためか、富士台の坂の両袖には土塁が廻り、街道を南北両側面から見下している。鶴舞城の外郭的存在なのである。





第27図 遺構外出土土器



第28図 遺構外出土土器

遺構外出土土器 (27~28図・図版10~11)

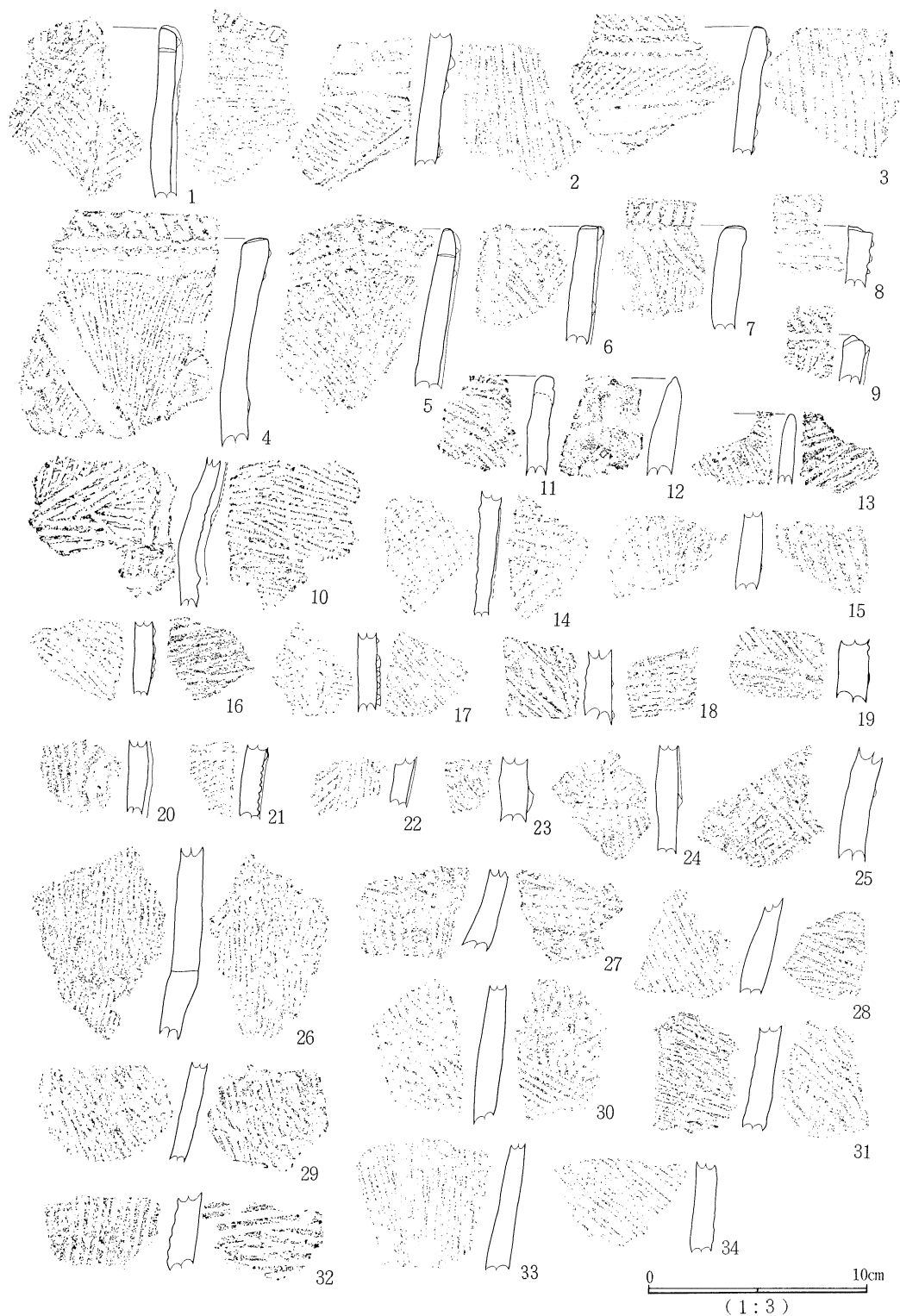
遺構外出土とは、包含層・出土遺構不明を含み、周辺遺跡踏査時に表面採集したものも入っている。本書南富士台遺跡は、県台帳(113)と市台帳(115)の江古田遺跡と江古田古墳群の一角に入っている。江古田遺跡は複数の遺跡の集合であり、江古田遺跡群ともいえるだろう。また江古田遺跡群中には江古田古墳群があり、富士台周辺には市台帳で24号墳~33号墳まで10基確認されている。踏査したのは第2図遺跡周辺地形図の台地内で、図示できたものは、弥生後期~古墳時代前期の五領式期までの土器であった。富士台周辺は恐らく、南富士台遺跡と同様な遺跡が集中しているのであろう。それらが最終的には古墳時代中・後期の墓域として移り変わるのではないかと。

- 註1 金丸誠(1984)「市原市雪解沢遺跡」千葉県文化財センター 雪解沢遺跡は確認調査ではあるが、住居跡9・方形周溝墓7・壺棺1を検出し、弥生時代後期中葉の久ヶ原式から古墳時代前半の五領式期までの遺物を出土。武田宗久・永沼律朗(1985)上総江古田金環塚古墳発掘調査報告書、市原市教育委員会 1963年南総郷土史研究会が主体となって調査した瓢箪塚古墳の正式報告書 雪解沢遺跡の成果を基礎に江古田古墳群も詳細に説明。
- 註2 鈴木英啓(1984)「新井花和田遺跡」昭和59年度市原市文化財センター年報 未だ希少な野島式期前半の集落の検出と近世三山塚の調査で、遺物の一部を収録している。本報告書未刊
- 註3 宍倉昭一郎他(1969)「上総国女坂1号方形墳」市原市教育委員会 墳丘下に1基弥生時代終末期とする竪穴式住居跡を検出し、甕・壺・高杯等5点を報告している。江古田・富士台古墳群の踏査記録も収録されている。
- 註4 石川須恵器窯跡 遺跡台帳には竪は4基とされている。酒井清治(1978)石川窯址 千葉・南総中学校遺跡
- 註5 参謀本部陸軍部測量局(1882年測量)鶴舞村を見ると、明治2年の井上氏転封後よりの鶴舞城築城址の土塁が本郭部に詳細に記録されている。それらは現在の遺跡地図にも読み取ることが可能である。しかし、本郭外の土塁は現存しているにもかかわらず、記載されていない。富士台からは鶴舞城の外郭となると考えられる。

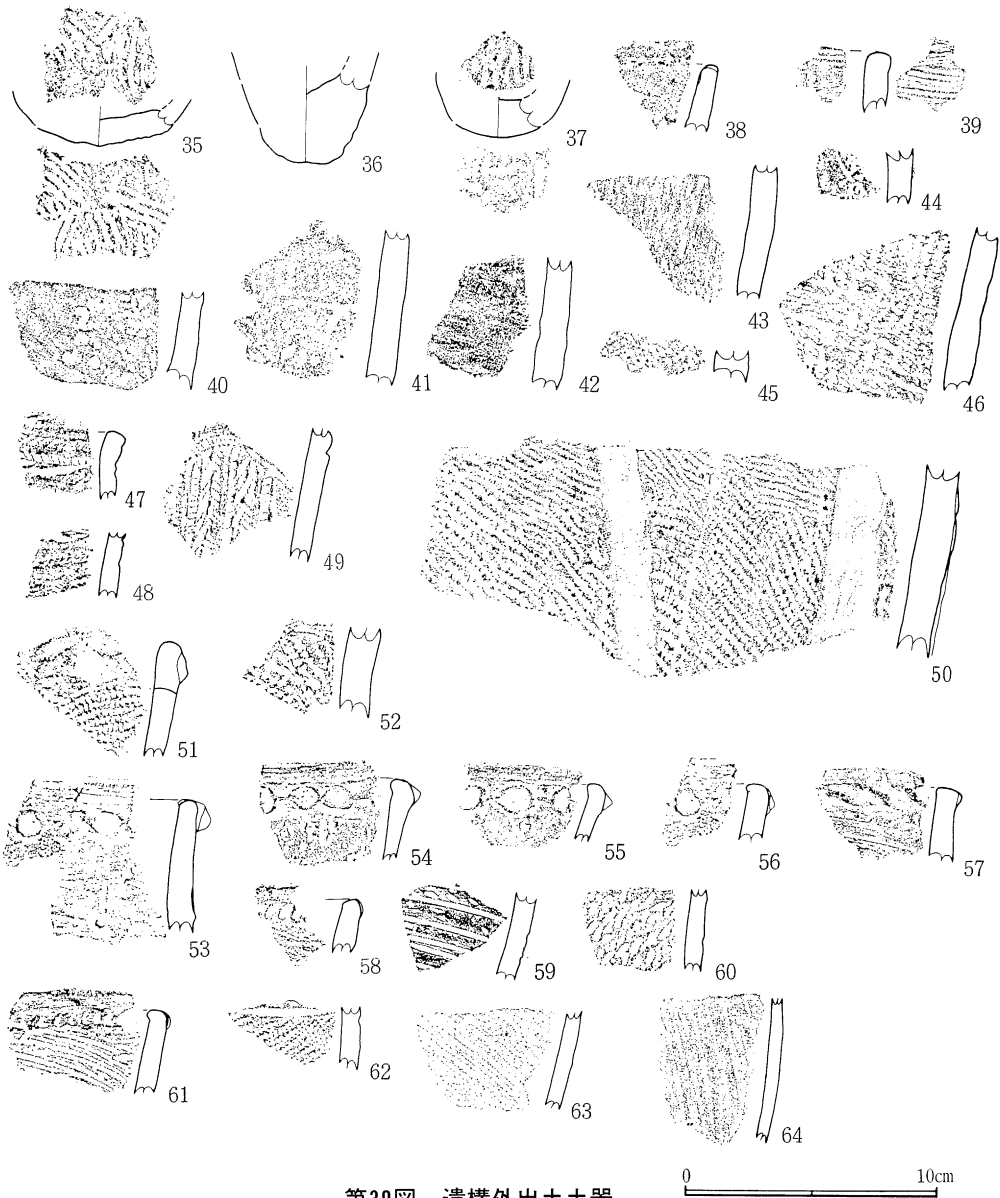
引用参考文献

- 青木秀雄 (1979) 「高輪寺遺跡」 久喜市埋蔵文化財調査報告書  
 伊藤重樹 (1983) 「南二重堀遺跡」 千葉東南部ニュータウン12 千葉県文化財センター  
 小幡重康 (1982) 「市原市史(下巻)第四節 鶴舞藩」 市原市教育委員会 市原市  
 金子直行 (1984) 「明花向・明花上ノ台・井沼方馬堤・とうのこし、2 縄文時代」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書  
 楠木理広 (1986) 「宇都宮清陵高校地内遺跡調査報告書 第3節炭窯について」 栃木県埋蔵文化財調査報告書  
 柿沼修平他 (1979) 「千葉県・市原市土宇遺跡発掘調査報告書」 日本文化財研究所  
 倉田芳郎他 (1978) 「千葉・南総中学校遺跡」 市原市教育委員会  
 河野喜映・穴戸信悟 (1985) 「山王山遺跡」 神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告書  
 鈴木英啓 (1983) 「石川城郭址」 市原市文化財センター調査報告書  
 高橋康男 (1985) 「草刈遺跡」 市原市文化財センター調査報告書  
 服部敬史・深田芳行 (1974) 「春日台・下耕地遺跡」 八王子春日台下耕地遺跡調査会  
 久永春男 (1979) 「新版考古学講座 4 原史文化(上) 弥生文化各説 中部」 雄山閣  
 藤崎芳樹 (1982) 「市原市番後台遺跡・神明台遺跡」 千葉県文化財センター  
 米田耕之助他 (1974) 「東間部多古墳群」 上総国分寺台調査団編

遺構挿図番号	器種	第9表 遺構外出土土器及び遺跡周辺出土土器観察表
遺構外 27-1	壺	せいけい 外面複合口縁部口唇端をケズリ面取り 付加条縄文→ヨコナデ・折り返し部下端縄文原体 押捺 内面ヘラ調整→赤彩 胎土 赤橙色粒混入 焼成 普通 色調 橙色 出土状態 包含層
遺構外 27-2	壺	せいけい 外面複合口縁部単節 R L・L R 羽状縄文・折り返し下端丸棒状工具の押捺 内面単節 L R 縄文 胎土 砂礫を含む 焼成 良好 色調 黄白色 出土状態 包含層
遺構外 27-3	壺	せいけい 外面単節 R L・L R 羽状縄文→円形貼付文 2 コ→貼付文内竹管文押捺→S 字状結束文→ヨコナデ→赤彩 内面荒れ削落一部ナデ残存 胎土 砂質 焼成 普通 色調 橙色 出土状態 包含層
遺構外 27-4	壺	せいけい 外面胴部結束文・ナデ→単節 R L 縄文→ナデ・沈線区画→赤彩 内面 ナデ 胎土 赤橙色粒混入 焼成 普通 色調 淡褐色 出土状態 包含層
遺構外 27-5	壺	せいけい 外面ヨコナデ→燃糸状縄文・単節 R L 縄文→山形文沈線 内面ヨコナデ 胎土 砂を若干含む 焼成 普通 色調 褐白色 出土状態 包含層
遺構外 27-6	壺	せいけい 外面単節 L R 縄文→3 段の S 字状結節文→縄文施文→沈線区画→区画外磨り消し→区画外赤彩 内面 ナデ 胎土 橙色粒混入 焼成 普通 色調 褐白色 出土状態 包含層
遺構外 27-7	甕	法量 底径 8.2cm せいけい 外面ハケ整形→底部ナデ 内面ミガキ 胎土 密白色粒子混入 焼成 普通 色調 外面暗褐色スス附着 内面褐色 出土状態 包含層
遺構外 27-8	?	法量 底径 8.5cm せいけい 外面ハケ整形→ナデ・底部ケズリ気味のナデ 内面ナデ→ハケ 胎土 赤橙色粒多量混入 焼成 普通 色調 橙色 出土状態 包含層
遺構外 27-9	?	法量 底径 6.7cm せいけい 外面ケズリ状ヨコナデ底部ケズリ 内面ハケ整形 胎土 密 焼成 普通 色調 外面褐色 内面黒色スス状物質附着 出土状態 包含層
遺構外 27-10	?	法量 底径 8.0cm せいけい 外面縦位のヘラミガキ底部ナデ 内面ヘラミガキ 胎土 粗小礫を含む 焼成 普通 色調 外面褐白色 内面黒色 出土状態 包含層
遺構外 27-11	?	法量 底径 4.2cm せいけい 外面ナデ・指頭整形 内面ナデ 胎土 橙色粒混入 焼成 普通 色調 淡褐色 出土状態 包含層
遺構外 28-1	壺	法量 推定口径12.3cm 現存率 1/6 せいけい 外面複合口縁ヨコナデ頸部ヨコナデ 内面ヨコナデ 胎土 密 焼成 良好 色調 外面橙色 内面淡褐白色 出土状態 包含層だが4号住出土に似る
遺跡周辺 28-2	壺	法量 頸部径 8.5cm 胴部径10.7cm 底径 3.4cm 現存率 口縁部のみ欠損 せいけい 外面頸部取り付け部ハケナデ付け 胴部浅いヨコハケ 底部縦位のケズリ気味のヘラナデ 内面胴上半部横位のヘラナデ以下ナデ 胎土 赤褐色粒砂粒混入 焼成 普通 色調 淡褐色 出土状態 富士台青年館脇表採 南富士台より西側低い台地上、当該期は周辺に広く散布する 原田・貝吹正次氏より提供
遺跡周辺 28-3	器台	法量 頸部2.3cm 底径11.6cm 現存率 脚部のみ せいけい 外面接合部ヘラ整形→ナデ・ハケ→縦位ヘラナデ→透孔4穴穿孔・基部ヨコナデ 内部受部孔1.1cm横位ヘラナデ脚部ナデ→ヨコハケ・ヨコナデ→ヘラナデ 胎土 白色粒混入 焼成 良好 色調 暗赤褐色 出土状態 33号墳南造成後出土
遺跡周辺 28-4	甕	法量 推定口径15.3cm 頸部13cm 胴径19cm 現存率 1/5以下 せいけい 外面口唇部ナデ整形角棒状に縁部タテハケ→ヨコナデ 胴部ハケ整形→頸部ヨコナデ 内面ヨコナデ・ヨコハケ→ヨコナデ胴部以下ナデ 胎土 白色砂粒混入 焼成 普通 色調 淡褐色 出土状態 33号墳南造成後出土
遺跡周辺 28-5	甕	法量 推定口径19.4cm 頸部16.8cm 胴径21.2cm せいけい 外面口縁部ヨコナデ頸部以下ハケ整形 内面に縁部ヨコナデ 頸部ヨコハケ 胴部以下ヨコハケ→ヨコナデ 胎土 赤褐色粒混入 焼成 普通 色調 暗褐色 出土状態 33号墳南造成後出土 備考 33号墳(第2図遺跡周辺地形図)の南はやや平坦面となり東の一段高い台地の斜面と移る。調査中から南総中学校生徒諸君が周辺の踏査に協力されたため資料収集が効果的であった。この場に記載し、御礼申し上げる。



第29图 遺構外出土土器



第30図 遺構外出土土器

縄文式土器 (29・30図 10表・図版12)

縄文式土器の総点数は 222点である。そのうち縄文時代早期後半の野島式の範疇と考えられるものが 197点 (表10) と 1 番多い。残りは繊維を胎土に含む縄文施文のものが 2 点、前期後半の浮島式と考えられるものが 3 点、中期後半の加曾利 E 式が 3 点、後期で所属不明 2 点、加曾利 B 式が 8 点、加曾利 B 式末と考えられるのが 7 点出土している。出土状態は遺構検出時のプラン確認時か、遺構覆土内出土である。しかし、縄文時代の遺構は検出されていない。土層観察によれば、黄褐色ソフトローム直上の褐色土中が縄文早期の包含層と考えられる。

野島式土器（29・30図1～43）（第10表参照）

挿図は原則として口縁及びそれに近い部位・胴部上半及び文様帯部・胴部下半及び条痕のみ・底部・無文又は擦痕文の順に並んでいる。隆起線文はすべて貼り付けによるもので、充填された沈線は、貼り付け後のものである。胎土は量の差があるが繊維を含み、砂粒も入りやや脆い。焼成はいずれもよい。1は波状を呈し、条痕施文後隆起線を斜位と鉛直方向に貼っている。2と3は同一個体の可能性があり、3の口唇に平行する2条の隆起線には口唇上の同様の刻みがある。4は隆起線間に充填沈線と無文部を交互に配置している。内面はナデで平滑である。5は波状口縁となり、波状部頂点より鉛直方向に隆起線を貼り付け、口縁部に平行に2条の隆起線が横走する。充填沈線は下位の横走隆起線を刻んでいる。内面は平滑である。6は口唇上に刻みを入れ、口唇外面端に隆起線を貼り斜位に垂下するそれに先行して鉛直方向へ一本隆起線を貼り文様を縦割りにしている。10は胴部が屈曲する部分で胴上半の文様帯と胴下半を分割するものであるが、屈曲下にも充填沈線が見られることから、2段に屈曲する上段であろう。

（30図44～46）44は小片だが、隆起線と沈線を有し円形竹管の押捺があり、ナデによる無文部を有するもので、鶺ヶ島台式の要素をもっている。胎土は繊維を若干含み砂粒も含む。45、46は単節LRの縄文が施文され内面はナデである。これらは図示以外出土がなく所属不明。

（30図47～49）浮島式と考えられるが本地域では類例が少なく、文様構成は不明で上下も明確でない。沈線、刺突、爪形を多用している。胎土は繊維を含まず、焼成は良好である。

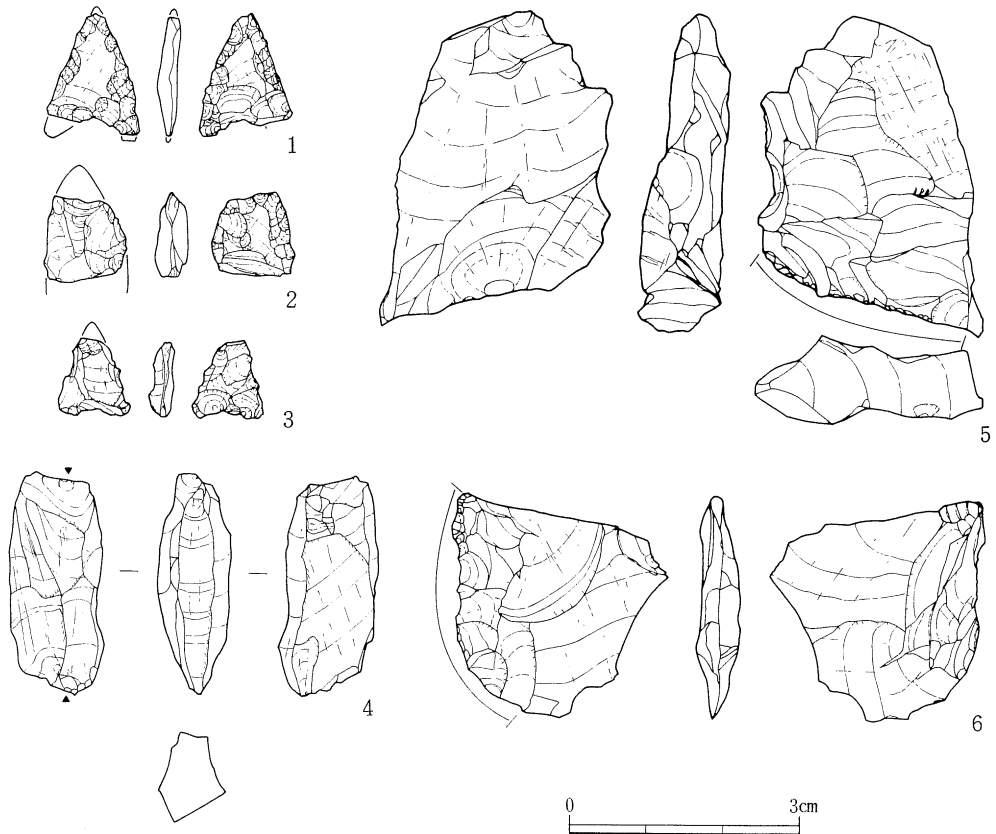
（30図50～52）50は加曾利E式末と考えられ、単節RLが微隆起線外を充填している。微隆起線内はナデ後赤彩されている。51、52は単節RLが施文された口縁部、胴部片で所属は不明。

（30図53～60）加曾利B式の粗製土器である。口唇部形態に若干の差異があるが、同一個体の口縁部でないかと思われる。58のみ時期的に新しく、59、60は胴部片で加曾利B式後半。

（30図61～64）加曾利B式末又は安行1式期の粗製土器と考えられる。62のみ縄文が単節LRが施文され上位に沈線で区画されている。紙面の都合上、大幅に省略した説明となった。資料的には極めて少ない点数だが中でも野島式は、良好な後半の資料である。

第10表 野島式土器組成一覧表

部 位	口 縁 部		胴 部		底 部
点 数	16		174		7
総点数百分率	8.1%		88.4%		3.6%
施 文 状 態	点数	口縁部数内百分率	点数	胴部数内百分率	
表裏条痕	4	25.0%	48	27.6%	尖底 1
片面条痕	2	12.5%	45	25.8%	尖底 1
擦痕(無文)	2	12.5%	49	28.2%	平底 4 丸底 1
細隆起線	8	50.0%	28	16.1%	0
沈線充填	0	0%	4	2.3%	0



第31図 遺構外出土石器

縄文時代石器 (31図, 11表, 図版12)

縄文時代の石器は全部で7点出土した。図示は6点であるがあと1点、黒曜石製の石鏃がある。それは平基無茎で両面調整・幅11mmで身上半を欠損している。石器はチャートと黒曜石製で、チャート3点・黒曜石4点であるが調査時採集したチップ等の比率は、チャート4に対し黒曜石は48となる。黒曜石で石器製作した可能性があり、それらの出土地点は野島式土器と一致する。石鏃は身幅、長さとも10mm前後の極小であり見落とし易い存在である。石器は遺跡の性格を表示する生産工具と考えられるもので大切に扱いたい。

第11表 縄文時代石器一覧表

挿図番号	器種 (形態)	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量 g	石材	備考
31-1	石鏃 凹基無茎	(15)	(12)	2.4	0.4	黒曜石	先端片脚部欠損
31-2	石鏃 ?	(11)	10	4	0.4	〃	先端基部欠損
31-3	石鏃 凹基無茎	(10)	9	3	0.2	〃	先端欠損
31-4	石核	28	12	8	3.4	チャート	残核か?
31-5	搔器	40	31	10	12.2	〃	稜を調整し刃部を作出
31-6	削器	26	28	5	3.1	〃	〃

### III 小 結

350㎡の小面積調査である南富士台遺跡は、縄文時代から古墳時代前期までの複合遺跡であった。野島式土器は神奈川県内を標式遺跡とする条痕文系土器群であるが、千葉県内の最近の出土例（木ノ根遺跡）を見ると地域差がある。木ノ根No.6遺跡A地点第III群土器a種は、口縁部断面形及び隆起線との沈線文の充填のないことで新井花和田に似る。それは、隆起線が極めて細く小さいことを特徴としており、文様帯が縦位に分割されていない時期だと考えられる。新井花和田は地文の条痕をそのままにして、細い隆起線を貼付しているものと、地文なしの平滑な面に細い隆起線を貼り付けたものがある。これらは胎土も同一で繊維を含む焼成の良いものであるから同時期であろう。新井花和田の2点は野島式の前半に位置するもので、系統としては木ノ根からの影響を受けているものだろう。南富士台の野島式は、隆起線の多用、充填沈線、集合沈線の盛行から、所謂野島式が成立した段階のものである。また胴部の屈曲する形態が入ってくる段階でもあろう。市原市は北部の東京湾東岸沿岸部より南部の丘陵地域に早期の遺跡群が多い。南部地域の調査も行なわれているので、当地域の野島式の変遷も明らかになるだろう。そして東京湾を挟んだ東西の地域の縄文時代早期の動行も明確化されるかもしれない。

弥生時代終末から古墳時代前期までの住居跡を9軒調査し、2、8、9、12、13号を弥生時代とした。それらは、住居跡の形態と出土土器で判断したが、出土遺物における弥生時代の細分は出来なかった。しかし、断片的に遺構外等から久ヶ原式と思われるものは出土している。古墳時代前期、五領式期の住居跡は4軒で密集している。切り合い関係から3時期には分離可能と思われる。出土土器から4号は五領式期でも前半であろう。それは番後台遺跡でも出土が報告されている櫛描文等を有する壺が出土し、器台を共伴するためである。4号を破壊した3号は11号と同時と考えられ主軸も一致する。7号は3号を破壊するため最後になり、古・4号→3号・11号→7号・新となる。市原市地域の弥生時代終末から古墳時代初頭の東海からの影響は小田部古墳・国分寺台の発掘調査の成果から周知されており、8号住居跡の東遠江地方の菊川式壺の検出、4号住居跡の櫛描文の壺等から南富士台遺跡においても、東海系統の事例が増加したことになる。

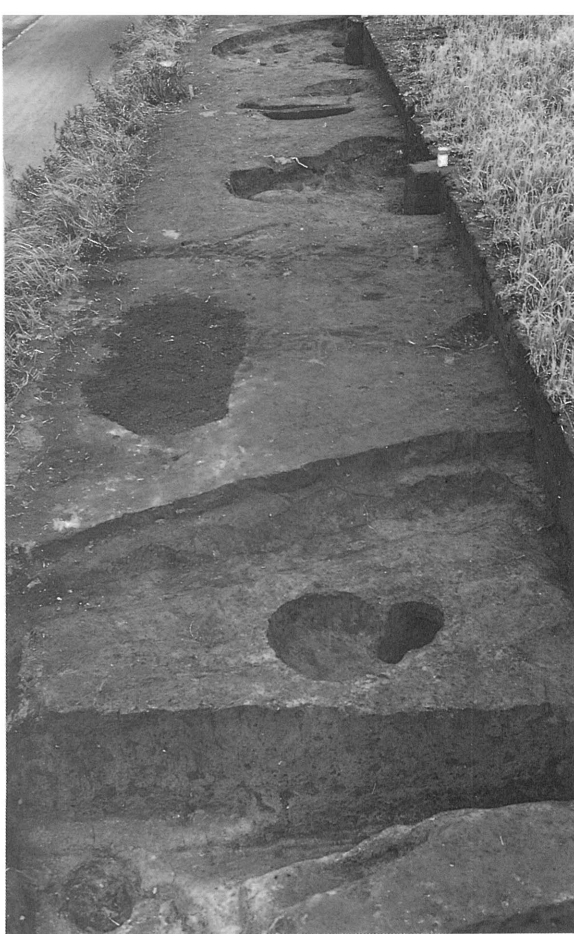
鶴舞城の外郭施設としての南富士台遺跡は、必ずしも明確ではないが、周辺地形から要所であることは間違いない事実である。城郭における本郭と外郭との関係は、鈴木英啓氏の調査でも明確にされている。「内郭に対する外郭、この関係は城を構成する上では欠かせず、切り離しては城の存在そのものは成り立つまい。」（引用「大羽根城郭跡」）

#### 引 用 参 考 文 献

- 宮 重行（1981）「木の根」千葉県文化財センター
- 白井久美子（1982）「長平台遺跡出土土器」上総国分寺台発掘調査概報
- 杉山晋作他（1972）「小田部古墳の調査」市原市教育委員会
- 鈴木英啓（1986）「大羽根城郭跡」市原市文化財センター



東地区遺構検出状況



西地区遺構検出状況



4号住居跡

3号住居跡

7号住居跡

8・9号住居跡

東地区住居跡群



富士台古墳

3号住居跡調査風景





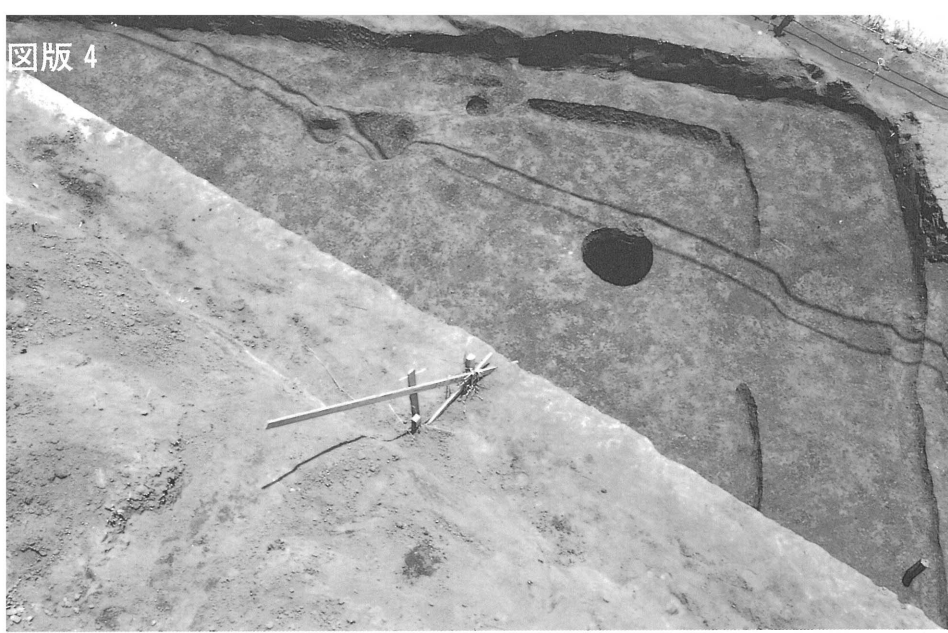
2号住居跡



3号住居跡



3号・7号住居跡  
調査風景



4号住居跡



3号・7号住居跡



7号住居跡



8号·9号住居跡



8号住居跡  
遺物出土状況



8号住居跡  
遺物出土状況





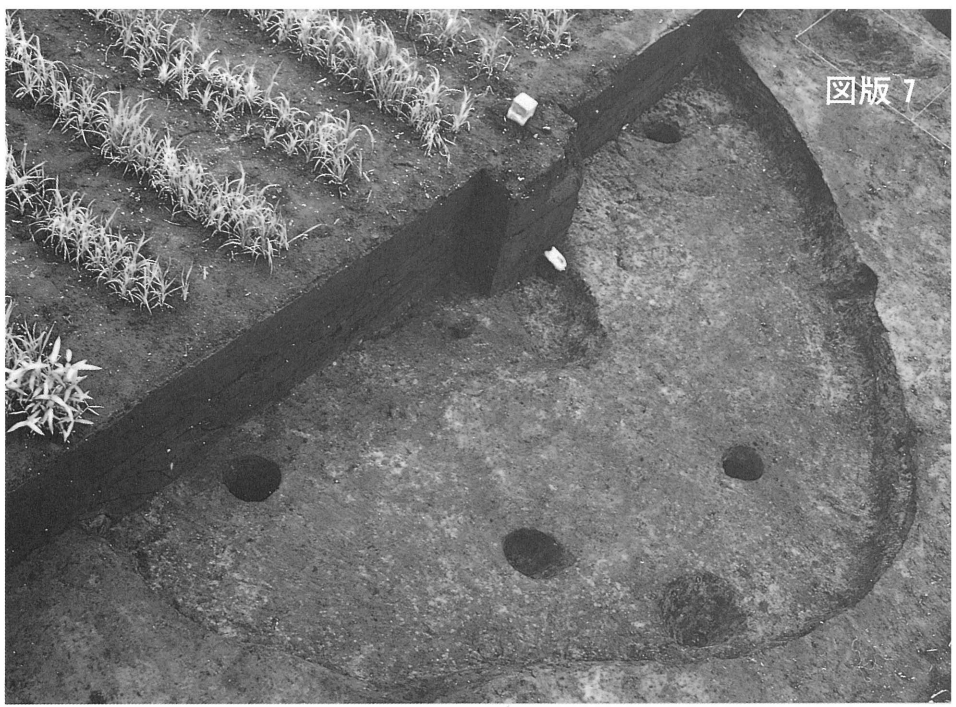
11号住居跡



11号住居跡  
炭化材検出状況



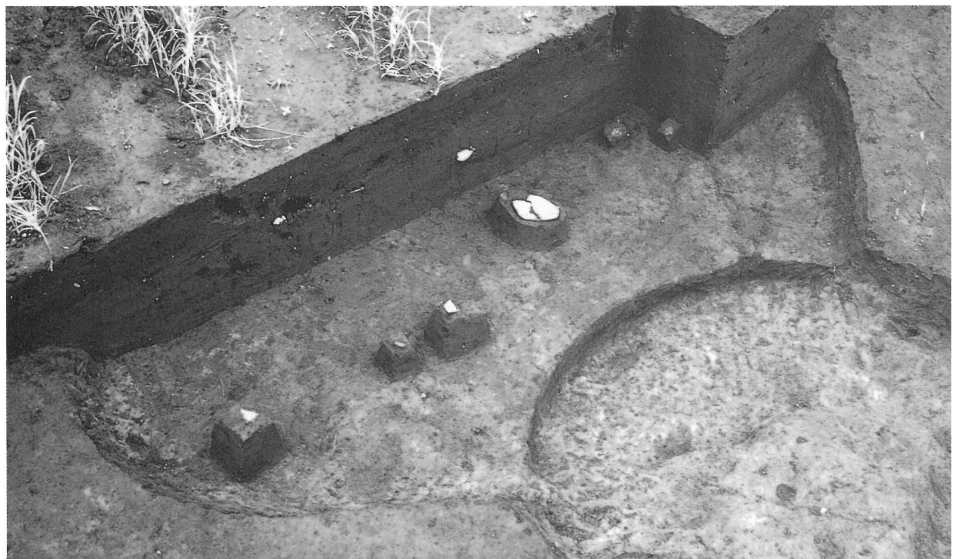
11号住居跡  
炭化材検出状況



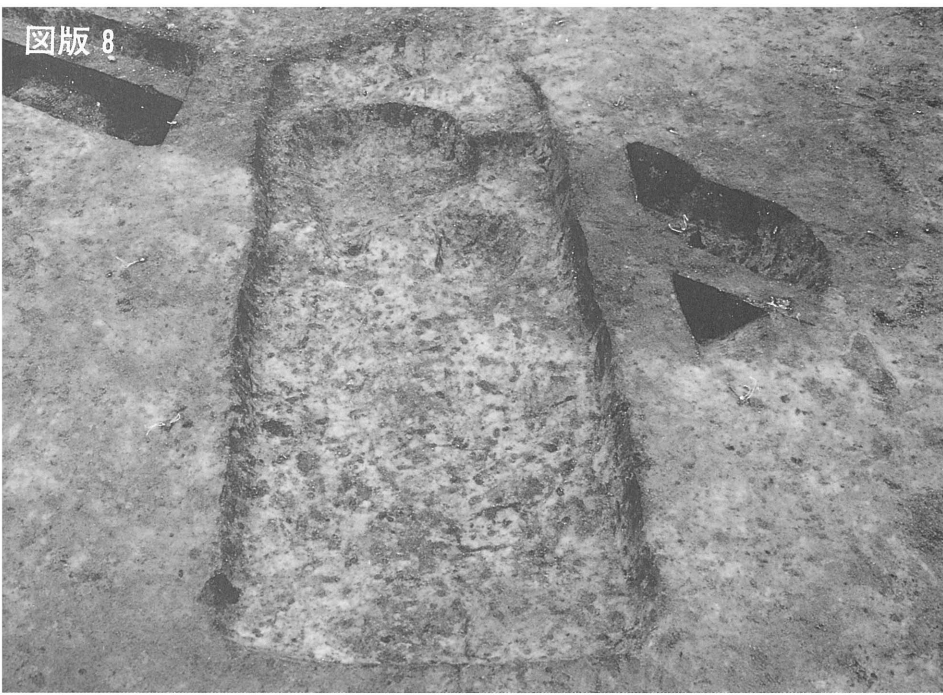
12号住居跡



12号住居跡  
覆土断面



13号住居跡  
遺物出土状況



1号土壙  
6号溝

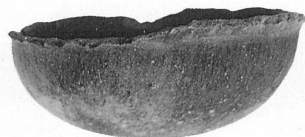


5号土壙

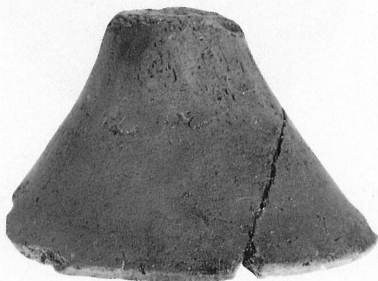
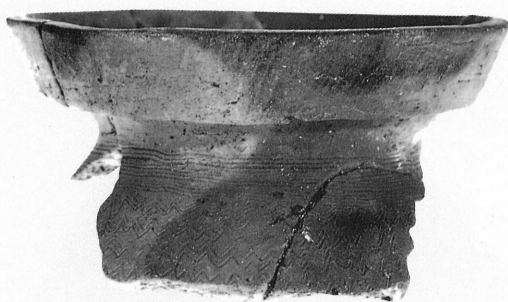


14号炭窠

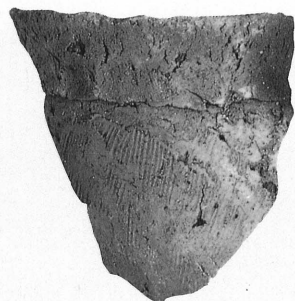




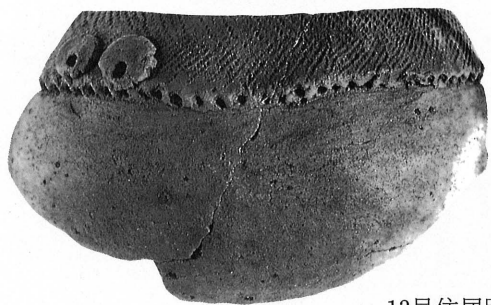
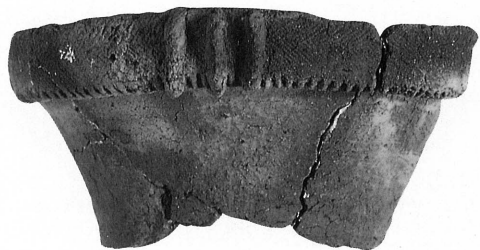
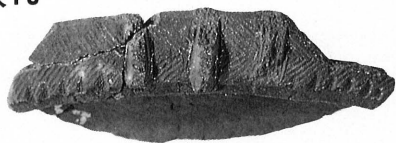
3号住居跡



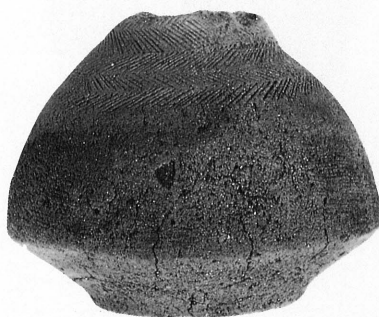
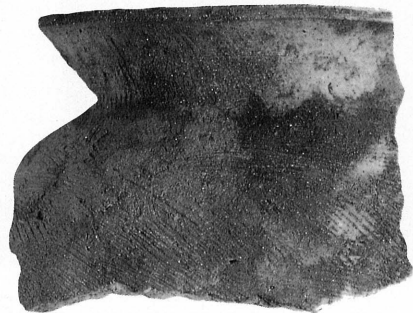
4号住居跡



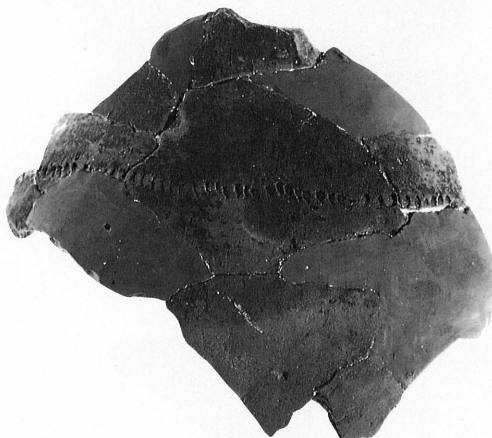
5号土壇



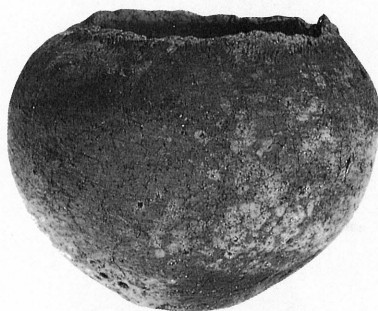
13号住居跡



8号住居跡



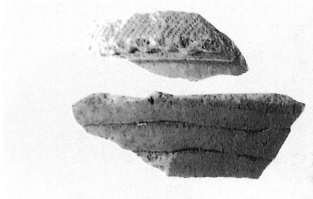
12号住居跡



遺構外



2号住居跡



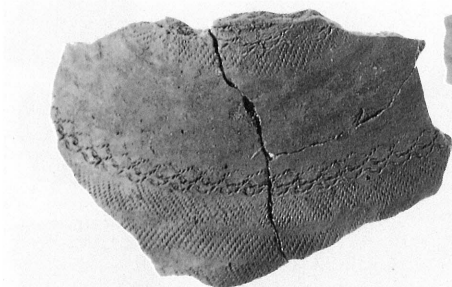
3号住居跡



4・5号住居跡



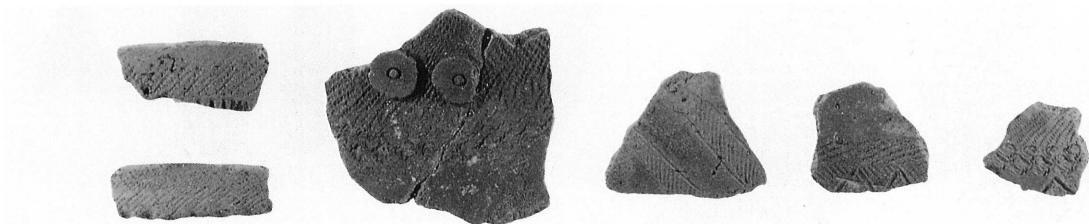
7号住居跡

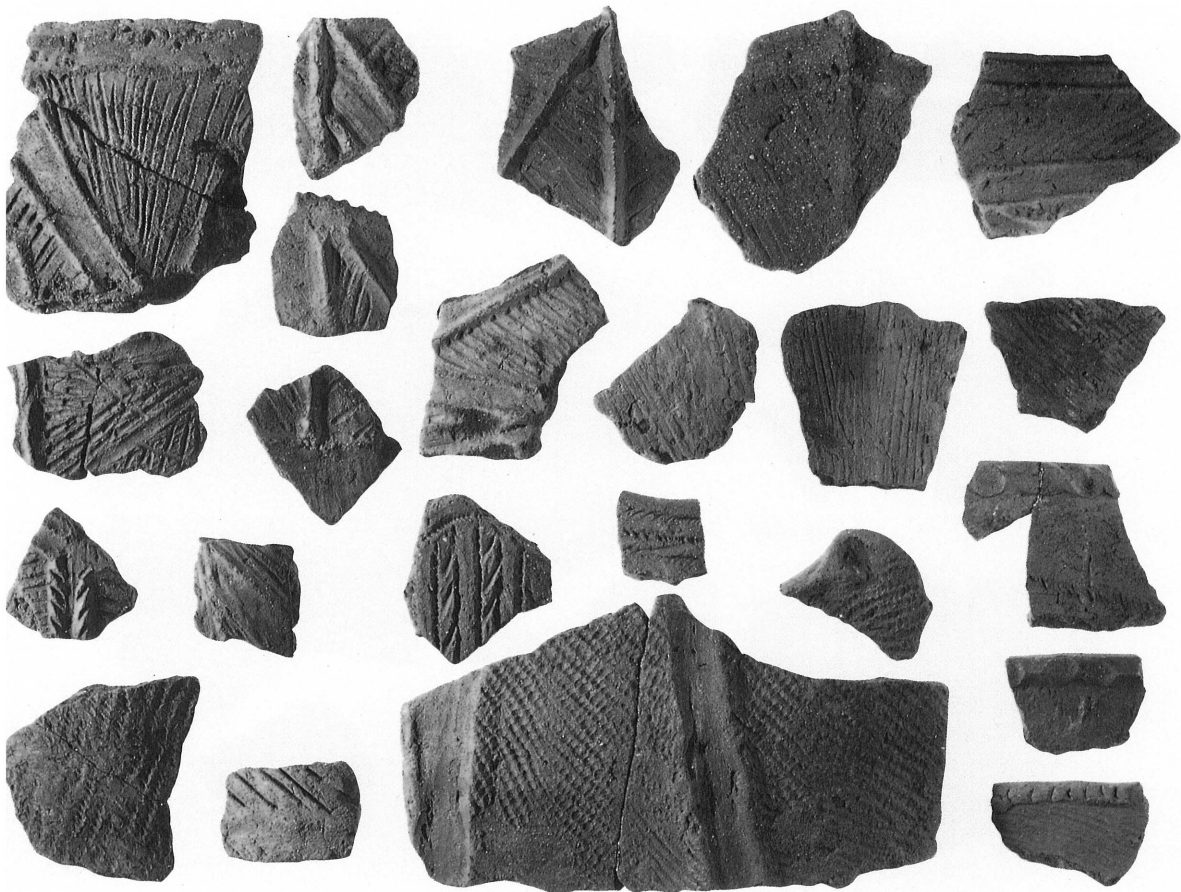


8号・9号住居跡

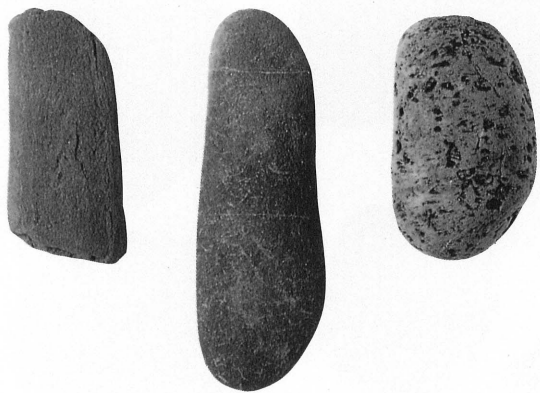


12号住居跡



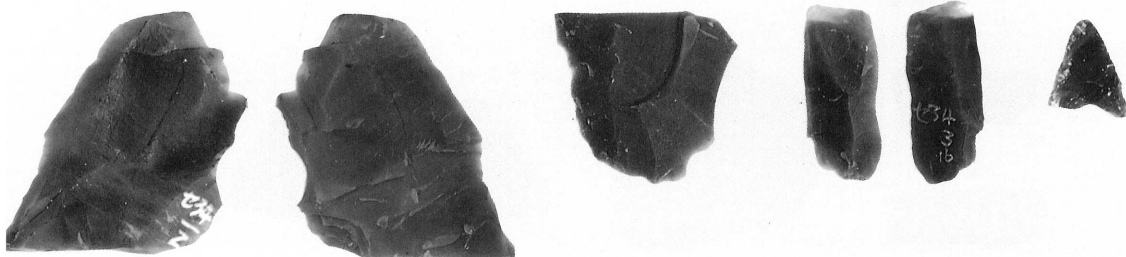


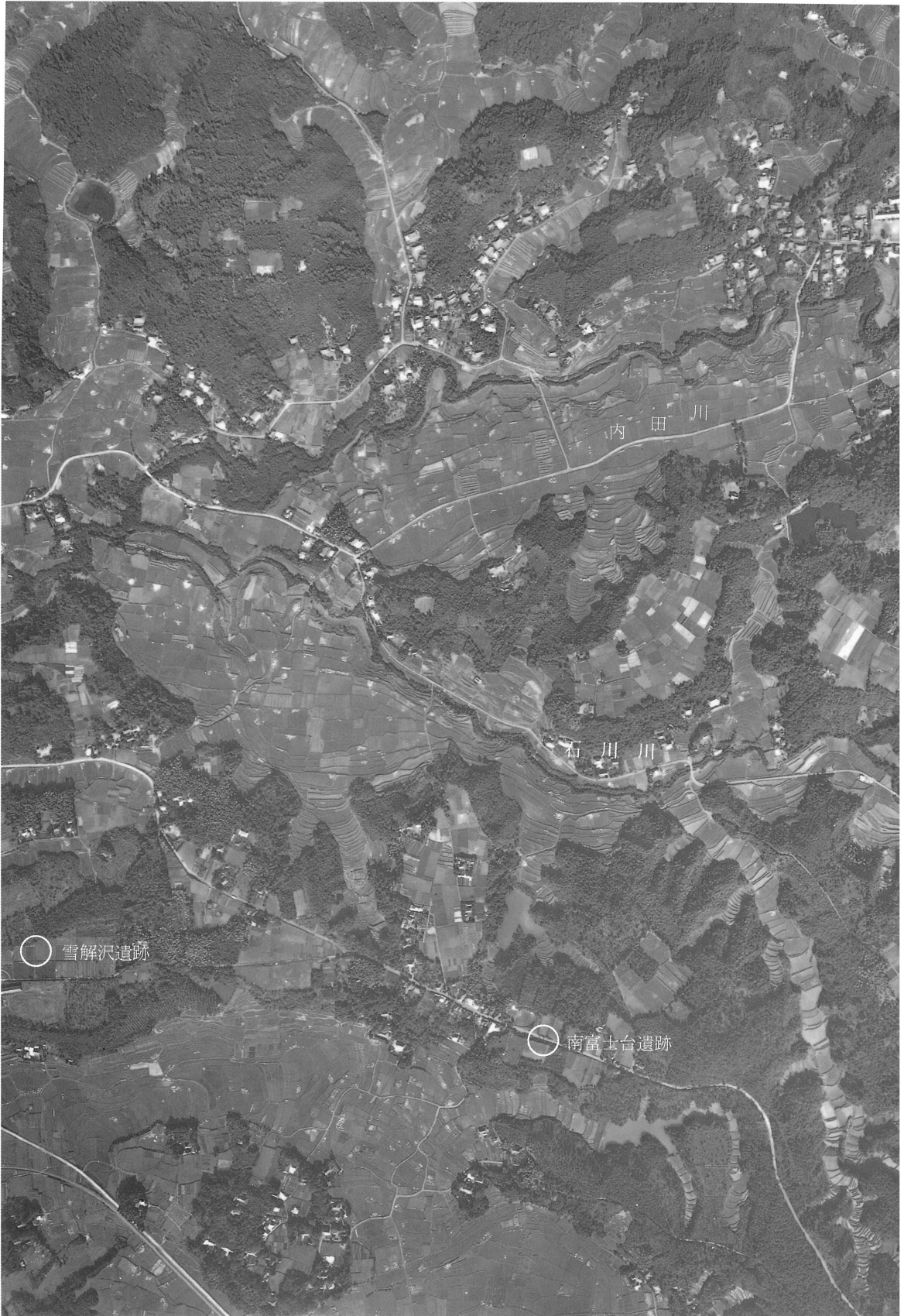
遺構外



2号住居跡

遺構外





財団法人 市原市文化財センター調査報告書 第22集

——千葉県市原市——

## 南 富 士 台 遺 跡

昭和62年 3 月25日 印刷

昭和62年 3 月31日 発行

編 集 財団法人 市原市文化財センター

発 行 千 葉 県 土 木 部

財団法人 市原市文化財センター

〒290-02 千葉県市原市馬立817番地

T E L 0436 (95) 2755

印 刷 (株) 国際技報舎市原営業所

千葉県市原市惣社867-18

T E L 0436 (21) 2355